

2128
2
126

檜山相馬大作忠勇傳

091313-000-1

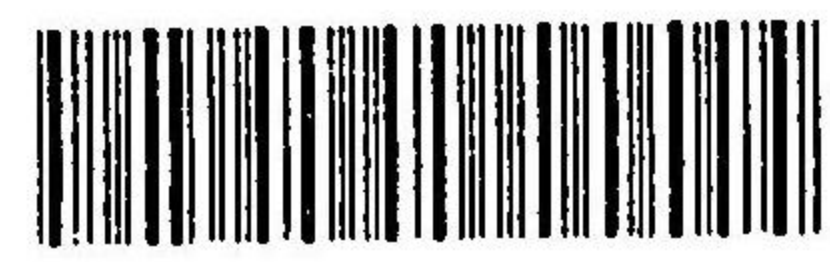
特10-767

檜山相馬大作忠勇傳

夢香仙史/編

M20

DBN-2191



檜山相馬大作忠勇傳序

仙史性野乘稗史ヲ讀チ好ミ操觚ノ暇アル時ハ唯ダ書ヲ友トシテ無聊ヲ

遣リ倦ハ則チ書ヲ枕トシ眠ル一日坊間ノ演講場ニ遊フ講師壇上ニ在リ

湖辨湧々南部藩士相馬大作忠勇ノ事蹟ヲ演ス坐ニ就キ之ヲ聞クニ其濫

觴檜山橫掠ノ事ニ原因シ該藩士尾崎秀之助ナル者其兇暴ヲ憤リ奮然回

復シ大志ヲ興ト名ヲ相馬大作ト更メ耐忍不拔ノ銳志ヲ權キ膽ヲ管メ薪

ニ臥スル一數年干辛屈セス萬苦機マズ區々タル一孤身ヲ抛チ以テ堂々

演ス仙史聞テ首ヨリ結局ニ至ル其間或ハ哀ミ或ハ怒或ハ愁或ハ惡ミ其

宿志ヲ果シ而自首從容死ニ就クノ局ニ至リ感激禁マラス覺ヘス案ヲ扣

チ大喝一聲嗚呼快ナル乎相馬壯ナル乎大作ト號ヒ驚而醒レハ則爾柯ノ

一

一

一



一夢ニシテ夢中聴ク所ノ事歴尙ホ耳底ニ在リ因テ筆ヲ授キ條ヲ逐ヒ其
 顛末ヲ臚記ス之レ仙史平生嗜好スル所ヲ夢ミルモノニテ所謂五夢中思
 夢ナル者乎國ヨリ夢中ノ聽聞ニ係リ其事蹟前後幽冥渺漠風ヲ捕ヘ影ヲ
 打ツノ談ニシテ世曾テ此事無キヲ信ス然リト雖モ大作カ耐忍不拔ノ精神
 能ク強ク挫キ弱ヲ扶ケ其素懷ヲ果孤忠君國ニ報スルノ思想ニ至テハ眞
 ニ偉丈夫ト云ヘシ其他之ニ關スル勇壯義俠ノ人士モ亦共ニ感賞スルニ
 堪タリ其忠勇ノ美名ヲ後世ニ遺ス豈偶然ニアラス寓言モ亦々勸懲ノ一
 端ナラン乎看官諸君痴者夢ヲ説クノ妄談ト之レヲ棄テス幸ニ愛讀ヲ辱
 フセラル、ニ於テハ編者ノ幸甚ト云爾

明治二十年小春天長節

夢香仙史



尾崎富左門

相馬大作



壽千代



關良助

伊達三治





柳瀬峠
須知書留
相子大作
此目
子三回



檜山相馬大作忠勇傳目次

- 第壹回 尾崎秀之助盛岡出立之事
- 第貳回 中山幸之進馬術に妙を顯す事
并 戸坂の娘が千代秀之助を戀慕の事
- 第参回 秀之助相馬精現へ頼願の事
并 雀の宮にて須賀留を討事
- 第肆回 大作須賀留の乗物を炮殺する事
并 砂手渡し場にて須賀留を騒がす事
- 第伍回 大作須賀留を討取る事
并 大作伊達三次而會の事
- 第陸回 伊達三次景清源太を討事
并 綱五郎土場へ立寄事
- 第柒回 綱五郎青鬼の片腕を斬事
并 綱五郎井筒屋を退く事
- 第捌回 井筒屋家内騒動の事
- 第玖回 於千代砂手にて難難の事
并 於千代再び危難の事
- 第拾回 噺三郎國定於千代と名乗逢ふ事
- 并 三日月藤兵衛殺心の事
- 第拾壹回 尾崎富右衛門於千代に而會の事
并 腕の佐吉耻辱を蒙る事
- 第拾貳回 阿武隈ヶ原大取合の事
并 關長助須賀留中守を狙撃する事
- 第拾参回 郡役所裁決の事
并 關長助所刑綱五郎殺死の事
- 第拾肆回 關長助槍山奉行を討事
并 相馬大作縛に就く事
- 第拾伍回 相馬大作縛に就く事
并 相馬大作縛に就く事
- 第拾陸回 大作妙見堂に須賀留を窺ふ事
并 大作妙見堂に須賀留を窺ふ事
- 第拾柒回 大作淺脚妙見堂にて須賀留家を騒
かす事
- 第拾捌回 大作味噌屋を成て須賀留家を窺事
并 須賀留右京亮を炮殺する事
- 第拾玖回 大作盛岡に歸り家縁取決の事
- 第貳拾回 南部大膳太夫大作と對面の事
并 南部槍山を取返す事
- 并 附 大作長助刑に所せらるる事

持10
767

檜山相馬大作忠勇傳

第壹回 尾崎秀之助盛岡出立の事
 人皇は一百二十代仁孝天皇の御宇時の執政徳川十一代の大樹文恭院殿源家海内靜謐の鎮撫を仰く時、天保年間將軍の城廓火災、灰燼して御館造營の際、臨み兼て奥州南部領内槍山は數多の良材有る趣、上聞、達し在りければ幕府則ち南部家と合し數本の槍材を献納すへさ旨を傳ふ。當時槍山奉行某槍材之れ無き趣を答て是を献せざりしかば、此時須賀留家より上達して南部の領地七十有余里の槍山を奪ひ造營の用木を献せり。是か爲めに南部の家門衰微を興すに至る。此期より忠勇の英士あらわれ國耻を雪ぎ禍難を救く其原由を委しく尋ぬるに、爰に奥州若手郡盛岡の城主其高二十万石南部大膳太夫侯の家中に家老職を務めし尾崎富右衛門が一子、秀之助と云者あり。幼少の時より英才智慮衆人に踰て其性質強まじく、羸弱を助け強驕を挫くの機備り、普く天下に其美を輝さんとの大志を興し、日外や好機會を得、武術修行として廻國せんと晝夜思ひ暮しけるに、一日父富右衛門世界全圖の畫圖を出し、一子秀之助が前に置解て曰、此繪圖を見よ。廣き世界の其中に我日本は他の國に比すれば一扇の要め程なり。然れども古より賢貴の人出て智識を磨き文武の道に敏し。故に彼外夷我神國の勢威に恐れ容易に海内に鉾をよせず。是我若原の中國御裳濯川の後世、清流するもゑんなり。殊に江戸表は各國の諸侯方參勤交代道路は縦横なし、文武修行の人々多くは此地に住居を構へ互ひに擧て奇術を競是故に心ある者は皆彼地に至りて藝道を學ぶ者少

なからず杯と種々東都の形勢を語りければ秀之助は余念なく聞いたりしが今此の願
 打明さんと思ひ父のまへに謹しんで申様私未十三才の少年にて事の祖長も辨へずいへど
 も一度江戸表へ趣き武術の道に心を委ね今南部の士靈衰情の眼を覺し且は日本一
 人の名譽を顯さんと欲す冀は父の許可を下し給ふ様頼入候と申し上しかば宮右衛門大に
 驚怖なしけれども子を見るを親に如かず其才智群は勝れしをり往未見所ありと思しか
 快よく許し與べしと思案を極め申すやう其方の願ひ莫大の望みにて感に堪たりと雖も未だ十
 三才の少年にて武術修行の旅立などとは以ての外の事なれども斯まで一心と思ひ立たる事
 なれば遮さるも余り詮なし汝が心底は任し遣わすべし去ながら江戸表へ始先て参る事なれ
 ば土地の勝手も不都合なるもへ山城屋方への添文を遣わすべしと筆を染さらくど書認め
 一封の手紙を渡しければ秀之助大に喜び二親に重ねて云様私し修行卒業の後迄は暫
 らく我をなさ者と断念決して心遣ひ下されなと堅く勵まし置盡せぬ名残もそこく愛を
 省きし旅立も萬夫不當の器量の壯士あり父母を本國に残し父の手紙を懐中して旅の用意を
 整へて吾妻の空へ急がんと古郷を跡に打跡足に任して道芝の剽りくして三日にして同國桑
 折の驛へ着せしが日之早や西山と没し夕暮近きたそがれ時秀之助は能き宿を求めんと尋ね
 て漸々伊達三右衛門と喚し宿屋へ泊りける此家の亭主三右衛門と云者は此驛にて名高き
 俠客にて別に内職之制札の裏をく、りし手仕事にて自分が指土場を一軒設け其身は日
 々勝負所に通ひしが流石老体の加減もや此節は土場も五月細くなり子分腕の佐吉に萬事任



尾崎 馬場
 我子
 世田屋
 とも見る

せけるが爰に鑿口宇吉鮫虎の寅といふ兩人の悪もの日々此土場に通ひ詰しが此程三右衛門が立寄ざるを幸ひに土場を我所有のごとくに成し無法不理の振舞多ければ佐吉此事親分三右衛門も語るに三右衛門も憤怒しながら其儘打捨置たりける扱又秀之助は旅の勞れよてすやとと寐入しが其夜の四ツ時分と思し頃不斗眼を覺し當邊を見れば是は如何に雲衛ばかりの大男拔足の体よて秀之助が寐所の傍に置たる刀を奪ひ去らんとする有様なれば秀之助起上り直にかの盜賊を引捉へ膝の下に組敷て亭主くと呼立れば主の三右衛門何事やらんと駈付來て見れば盜賊は我子の三次にて有りければ胸り仰天し謔といふ盜人を捕へて見れば我子也と今現在に見る事よと怒りの顔色満面を顯われ悴三次がまへに進み出汝如何なれば斯る淺猿しと所業を爲や己れ其分にて置べきやと打擲なさんと有ければ秀之助是を宥先是に何んぞ深ひ譯も有べし先づと暫しと押鎮め三次又向ひ其方が只今の偽体何故ぞや其譯を話すべしと問ひければ三次平伏して述ける様は此の驛に鑿口宇吉藏あんの寅といへる二人のわる者非道にも我父の持土場を奪ひ取り以故心外に存じ彼等二人を刺殺さんと思ひ夫もへ御差料を盗み申たり何卒は高免下さるべしとの事の譯柄申述只管其罪を託ひければ尾崎手を打て感伏しよさかなく人として斯たる性質は有度き者あり其氣前にめで此短刀を借與へいへば不義非道の惡人原存分に刺殺し召されと云しかば三次は是に屬まされ勇氣猶も一倍なし左あらば暫し伊刀を拜借と其儘家を立出て土場をさして馳到り様子如何と伺へばあんの寅は宵の口より酒食に飽器具も徳利を打捨て前後正體なく大の字

なりに飛入ければ是は屈竟仕濟したりとわんこの寅と足よて蹴り起し立んとするを只一刀に切り下げてなんなく首を打おとせり斯と知らず鑿口宇吉藏何か包を携へて入口入浴離と引明て這入らんとする此方より一聲號んで突込む刃に横腹を割抜れ血煙り立て相果ける三次は無念を晴して懐ひ勇んで我家へ歸りけるが其夜も明て鶏鳴を告げれば秀之助は宿の拂ひを仕舞發足の用意致しける所へ伊達の三次出來りて秀之介に向ひ云ける様貴殿は是から何國へ越はしあるやと尋ねしかは秀之助我ら武術修行の爲江戸表を志さして參るなりと云ければ三次は左あら何卒下僕に御召連下され度御同伴仕べしといひければ秀之助も三次の器量未頼母しく思ひければ然らば御同道申べしと秀之助は三右衛門へ一禮述て又三次は父へ刺れを告二人の若者道連にて江戸表へと急ぎ行

第二回 中山幸之進馬術の妙を顯はす事 戸坂の娘於千代秀之助を戀慕の事

斯て秀之助三次の兩人數日にして江戸芝札の辻まで建立しが秀之助三次又向ひ申やう我は是より能師匠を撰み武藝修行すへき所有なれば貴殿もよき師を求め上達致さるへし互ひも立身出世を期すへしと此所よて兩人相別れ又の再會をぞ約しける諸も秀之助は夫より本所松居町武丁目山城屋武左衛門方へ參り父よりの手紙を渡し萬事世話を頼まべしと有ければ武左衛門先手紙の封を切て讀ければ前年大恩を請し尾崎富右衛門よりの頼み状なれば是は貴方が尾崎様の御息よ渡らせ給ふか何はともあれ先與へといざなひ色々應いたしけるさても此武左衛門は木綿商賣にて廣く諸侯方へ出入なし江戸表よて名代の商家なり

秀之助當家に凡五六日斗り逗留して名所古跡大槪に見物し今日は兩國橋の邊りを通り掛と
 橋向ふより立派ある侍ひ馬に鞭して飛鳥の如く馳來りまた此方よりは車力速めて詰の辻を
 曲る都合に車馬相對しわわや如何なるへきやと往來の人々噓を冷し見る中に馬の上より有た
 る侍ひは手綱を後邊に引立を縮めて身を捻れば馬は兩足上へ揚げ立止つたる其奇術に双方
 無事に行過ける此体を傍に見物してありし秀之助大ひにかんじ馬術の師を頼へきは此人な
 りと自分勝手よ心を極めあけ行馬の後より一目敵に附したひ行し彼の馬上の侍ひは紀筋
 の屋敷の門口にて馬を止めて下んとするを秀之助は馬の轡を腕りと捉へや様我社は南部の
 者にて尾崎秀之助とぞ者なり只今斗らすも貴方の馬術は感伏せり何とぞ不肖ながら今日よ
 り門弟になし下されかしと頼みければ侍ひは見所ある者と思ひければ我家は入れ當時何れ
 の宿を定めたるやと問ければ秀之助や宿は本所松居山山城屋武左衛門と中方なりとい
 ひしかは則ち人を馳遣り武左衛門を呼迎へ委細尋ねしかは武左衛門私し宿謀仕の間門人よ
 おし下されたとしと頼ける此武家は何人なるといふに紀州家に於て馬術を師範とする中山幸
 之進といふ人なり秀之助は先此家まで十五才の年まで朝から晝まで馬術を稽古に晝後より
 神學射書數書など殘る所なく學ひ盡しければもいまだ劍道を稽古せざるをうれひ中山殿よ
 依頼しよき師を得んと思ひ暮しけるが或日秀之助稽古の寸暇に裏邊より出てあたりを詠め居
 たりし隣り屋敷にて竹刀の音が耐しく聞へしゆへ耳敲て、伺しひが案に違はぬ劍術の稽
 古あれは秀之助大ひに歡び能き師を得たりと中山幸之進を頼み親分にて隣り家敷戸坂内記

といへる方へと入門いたしける

因に曰く秀之助の如き器量の者が現在隣り家敷に劍道の師有を知らざるは不審に似た
 ると雖も左にあらす此戸坂内記外地に道場あつて是に稽古いたせしあるに此度ひ我家
 に道場を設け引越したればなり

斯て秀之助は滿壹ヶ年が間晝夜を分たす劍道を勉勵せし故天晴不敵の手並にあり是をあれは
 最早大丈夫と歡び勇む其中に光陰矢の如く十六才の春を迎へ爰に戸坂内記の方にては初稽
 古と有て數多の門弟衆集ふて道場に並び我劣じと仕合を勵みける此時秀之助も來りて仕合
 いたしけるが此内記の宅に二女あつて姉を千代といひ妹をつとと呼しが此二人の娘名高き
 尾崎秀之助の仕合を見んと道場の此方より見物して居たるが秀之助の風体さあがら野鼻の
 如く頭上の髪は縮みて面色垢無く衣服着古く實に見惡き形さまなれどもじつと濟し詠むれ
 ば何處に美風を備へ自然と人品骨がら顯はれければ二人の娘秀之助又戀慕ひ取分け姉のお
 千代は彌増て此節只ならぬ有さまにて晝夜臥床を離れず父の内記は大ひに心痛をなし其醫
 を迎へて療治を盡せども其しるしを或醫の中には是は氣病ひなれば本人に得ては問ひ遊
 ばさるへしと教へしは内記は乳母に中附千代が病氣の義を問吳よと頼みければ乳母お千
 代に尋ねしに全く秀之助に戀慕ひ氣病ひの由や上れば内記は聞て大ひに當惑し先秀之助に
 此事を明し何卒不束ながら姉娘千代を女房に持下されかしといろく頼みければとも元來大
 望ある秀之助あれは一朝一夕に請がはず宜しき返じもなかりしに爰は内記が門家に老弟子

の山下嘉十郎といふ者あつて秀之助を一間に招き申けるやうと扱此たひは當家の娘子か千代さまが足下を戀慕ひしを親内記殿より足下に色々縁儀を頼み入れらるゝも何か不足にて御否みなさるや又御身は忠義を思ひ仁惠を全ふし玉ふに今一命の危き婦女子を打捨らるゝは余り其意を得ず何卒この縁談を私に面じて御請がひ下さるへしと言葉を盡してすければ秀之助は兎角に承知なく御邊の仰尤至極あれども我ら兩親の有身分よて容易く一己の了簡に相計難しと云へは傍への唐紙押明て入來たる中山幸之進やう此度の縁談不佞か親師を兼て媒ち致すべし快よく請がひ下されかしと中山山下兩人が左右より責立れば秀之助も詮方盡て左あらは請かひ申へけれども私し未だ心願を果さず依て心願成就の後には實の婚姻仕へし此度は只く假の誓ひよて夫婦約束の縁を結ぶへしとありければ此事をも内記はじめお千代にすせしかば親すとも悦びて後の縁儀を待よける扱秀之助には色情の事は少しも思わす只く藝道よのみ心を委だぬ修行怠りなかりける爰は三月彌生の節句何國も内裏離を祭るは何處も同じ嘉例にて内記の方にて悦びを賀しか千代は酒肴を拵へ山下嘉十郎に持せ遣り大秀之助へ懇應を膳を勧めける故秀之助大ひに歡ひ是は千代どのよりの馳走有難く頂戴仕るへしと箸を取んとせしかば山下嘉十郎席を進言謹でいふやう如何に秀之助殿此膳部ね千代さまの馳走あるが君には如何思ひて食しめさるやと問ひしか秀之助は打笑ひ是は山下殿には異事をの給ふか假にも女房お千代どの、馳走其際切を喰ひ食すの所なりと答へければ山下やう責殿は此頃此縁を女や酒食の榮耀をな

し玉ふ時にあらず早々御恩慮を廻らし給ふへし扱といへば秀之助一切合點もかぬゆへ山下に向ひ此秀之助之於榮花酒食女は狂ひおと一切仕らす何故左様ある事を仰らるゝやと尋ねしかば山下やう夫では御身は未だ國元南部の様子存しなきや御國元に於ては此度將軍家の造營に付枝下三間直徑壹尺の檜木其數貳百本獻納致すへき旨御達し有しに檜山奉行荒浪十藏治又依て無き旨を答へしかば此時須賀留家より仰の檜木を獻納仕るべしと上達せしかば將軍家より其方の領地は檜木有やの趣き御尋ねに成しに須賀留の答へには南部須賀留の境ひ數里よわたりし檜山南部の領分よ有て南部の領分にあらず故は用達仕へしと南部領の山脈は登り八十三里が其間須賀留領の椋杭を建て奪ひ取たるよし此檜木山を取返す者はは身より外にあらずと物語ければ秀之助おどろきながらさもなき体にて左様なる騒動有しや目さす相手は歴々の家柄あり高か知れたる匹夫の我らごとき者壹人位ひ何はと思へばとて及び絶たる事なりと一向取敢ず余所の事の縁よすければ山下も言葉なく立去りける扱も秀之助は山下よは斯は答へしもの、兎角に本國の事が氣に掛ければ直様筆を染し先女房千代への離縁狀に内記への禮狀を添て一封とし又中山幸之進へは是まで永く大恩受し禮狀一封猶又山下へ懇切にいゝるゝ世話ありし禮狀都合三封の狀を中山宅へ殘し置其儘此所を發足して相摸地さして急ぎ行

第三回 秀之助相馬權現へ誓願の事并雀の宮にて須賀留を討事

去程に尾騎秀之助は相州足柄山相馬大現權の神社にぞ來る是は良將の子にて承和年中王家に

反き貞徳秀頼の爲に廣島山に亡滅す故に此神
 古今の荒神なりとぞ
 則ち秀之助は右の太股を切扱き神前に供へ拜殿に頓首して心願を籠括ひて曰く今般僕主
 家の爲に須賀留家三代まで殺誅を加へんと欲すおわれ翼ば神明の靈験を垂れて御力を添
 かしと祈りける是より号を改免下總浪人相馬大作と名乗る時に拜殿の中に人あつて此事を
 聞世には能く似たることを願ふものもある者かちと思ひ拜殿より卒と出此者を捕へ俱に須
 賀留を打の協力をなさんと聞き所を捜り見るに手にさわつたる衣服の袖腕かと掴み其事實
 を問んとせしが大作はすは一大事を聞れたり顔見られてはならじと振放して逃んとするに
 此方は袖を捕へて放さず互ひの力に袖はちぎれて此方はどつと打轉び大作は見向きもせず
 して馳行けり又此拜殿より出し者は何人ぞやといふに是奥州須賀留の名刀鍛冶にて國景の
 門人喜三郎國定といへる者よて七日前より當社に通夜せしなり何故へ國定社に通夜せし
 といふに師匠國景須賀留家より守り刀を拵へ呉べき旨依頼を請け心を盡して鍛ひ上しに國
 景生涯に稀る良刀を拵へたれば此刀御差料に成し給はり度よしや上しかは短慮にも大ひ
 に怒り玉ひ直ちに國景を手打になし玉ひしなり故に門弟の國定此無念を晴さんと思ひしを
 れども相手は何條大家なれば神の助力を假ではと荒神なる相馬神社に祈願せしとなり
 因にいわく相馬大作人に一大事を聞れあがら逃さるは余り其意を得ずして比興に似た
 りといへども全く左にあらす其身本懐を達するまでは大切の體だ故に假令劍道の嗜み
 あれども万斗遊るに手なしと肝要の心意成べし



扱も大作は足柄山を立退き夫より諸々方々と懸廻る中に蟒ばと清兵衛なる者の請人にて南部馬飼場の別當に這入り込元來大作は才智勝れし者なれば壹ヶ年程の間に馬の飼椽育て方の工合或は飼藥馬の洗ひを習ひ覺へ最早や是なれば何方へ別當に這入りし迎も大概馬の養ひ様は出来るべしと思ひければ疾くも此處を退き又もや江戸表より馬喰町武蔵屋千太郎といふ宿屋へ泊り凡四五日余りも逗留し一日享主の千太郎を呼ぶけるやうは外の事にも有す其許に折入て頼度事あり當江戸表に中間別當の奉公に有付たひが何と亭主世話をして呉かしといろく頼みければ亭主中椽奉公ば諸方に多く這入込み口が御座れども確とした請人があひ時は何方の屋敷にも差入中事相叶ひずさすと相断りければ大作申やう然ば其請人がなき故に其許か請人と成り吳よ其許り此金子と兩刀を汝預け置へし若また紛れ事ても出來し其節は其金と刀にて事を相計かるべしといひしかば亭主さながら怨と道つれなれば是は手當物を以ての御頼みとは面白さ仰かな如何にも世話仕るべしと直さま方々を尋ねけるに折よく爰須賀留の馬部家より別當奉公人の穿鑿中故大作に此方は如何と尋ねしかば大作も須賀留とあれば望む處なる故又大い歡ひ直さま別當風の衣装を着し假名を下總の秀吉となし須賀留の大部家へ入込みける扱大部家に飼ひ育つる馬は皆々悪馬斗りにて駿馬良馬とてはあく又飼餌も別當が減り取て十分と興へされは馬は自然と疲せ衰へて骨筋立て荷馬にも劣る計りの有さまなり然るに秀吉が部家入してより以來良馬多分出來るなり秀吉は馬に飼餌を多分と興へ又洗行も怠りなく能晝夜を別たす養育なし

ける故實に馬は遅くなり又外の別當等は一人持飼の馬五疋或は八疋あるに秀吉は一人にて二十疋余りも持飼するもへ部屋頭大ひに是を感ける此事いつしか須賀留殿にも聞へければ召れば傍別當に取立ありける徳て其年の八月十五日須賀留殿には雀の宮まで遠乗りの備し有りければ大作は是屈竟の折ありと内心に深く悦び彌々日限明日と定まりければ大作馬屋に來りて殿の乗馬に飼餌をば興ふ日に白米を一掴み入置馬の爪を斷時足の裏をさり置きて翌日を今やくと相待ける早其當日に相成ければ殿には裝束錦纏にまどわれ鹿毛なる馬に打またがりわつかには供二人を引つれ下總秀吉に先を拂わせ雀の宮迄遠乗りありしに既に宮近く來る時殿の馬は飼餌の利目よや供の馬より遙かに先立凡道法五六丁も隔たりける此時殿の馬は自然と足の痛みを覺へ進み兼たる有様なれば別當秀吉爰なりとて馬の傍に近寄と見へしが痛みし馬の片足を骨も碎けと蹴上れば唯さへ痛みし其上に蹴られて何條たまるべきや兩足折て横様とつと倒れて伏しければ殿はたまらず眞逆さま落馬有しを秀吉得たりと近寄て殿を一突めてければ其儘息は絶たけり此時は秀吉は素知ぬ体にて後供の侍ひに殿の必落馬を申上ければ二人の從士大ひと驚き走來りて是を見れば最早息は絶し也へ先殿の遺骸を屋敷へ引取病氣屈を爲し事濟けるが如何にも今日の始末下總秀吉は傍に別當たりしが合點の行ぬ事ありし故馬の飼場を改め見るに白米少し残りある也へ是正敷秀吉の仕業なりと直椽秀吉を呼寄種々と説明に及び別當凡五十八斗の十重廿重に取巻て召捕んと致せしかば秀吉は事どもせず當るを幸ひ切立竊立瞬間に數十人を打倒し一方を切

援て虎口を遁れ何處ともかく逃去りける

第四回 大作須賀留の乗物を砲撃する事 并 砂手渡し場にて須賀留を獲がす事
扱も相馬大作は須賀留の馬部屋を逃去り其翌日早天江戸市中所へ張紙をなしける

其文面に曰

今般須賀留多京事懸逆無道の舉動を行ひし故天に代りて是を誅戮する者は下総浪人
相馬大作なり

右の如く所々に張紙有けるも須賀留の諸士等大ひに驚き人を馳せて張紙を取らせ惜ま相馬が慮意なりと専ら詮義嚴重に致しける扱も相馬大作は江戸を逃ぞ信州神宮寺村高橋市郎右衛門が宅にて足を止めける借も此高橋といふ人は信州一國にての豪富として平常風雅の道を好み我裏に別に長家を建一藝の有ものを召さ抱へ自身に百般の學術を試みて朝夕の樂しみと致しける大作此事を途中にて聞こは能便り所なりと假に又改名して江戸牛込薬店の畫師宗丹と名乗りて當家に遣入込みけるが凡百日余りも逗留して空敷光陰を送りしが爰に此家の下男に三助といふ者の勸に依て山間へ小鳥を打に行けるが山々の景色を詠め麓の方を見て居たりしが一筋の街道あり大作三助は向ひ尋けるに此下に見ゆる街道は何れより何方へ通行する道なるやと有しかは三助答へけるは此麓の街道は須賀留街道なりと申ければ大作是を聞て心中に笑を含み先此日は兩人の者は立歸りしが大作思慮を廻らし夜分人の寐入しを伺がひ密に張紙筒の鉄砲を拵らへ人の入來る時は疊の下へ隠す手筈にして人目を忍ひ夜なく怠情なく張紙筒を制して須賀留の驛路を狙撃なさんと専ら心魂を碎さける然るも大作例の如く張紙筒を拵らへ居る所に隔ての唐紙を剥明入來る一人の男あり大作が傍近く來る故大作手早く筒を隠して彼の男の顔を打撃めけるにかの者の申けるは他の貨座敷へ一言へ挨拶も致さず遣入し無禮の段段平は高免下され度ひなり併し只今傍へより伺がひしに邊の手細工にて拵らへ給ふは全体如何なるものにもやと尋ね拵られ大作は勃然として犬ひに怒り此奴能忽なる事を問ふ者かなまさか連へば討果さんと思ひければ一言半句の答へもせざりければ彼男猶も大作の傍近く進み寄て密か言りけるやうは我は元奥州須賀留の刀鍛冶國景とや者の門人にて喜三郎國定と申者なり然に師匠國景は須賀留家の爲に御手打にあひ心外の余り去ぬる頃相州足柄山相馬神社へ心願を誓ひし貴殿も同じく須賀留を恨み心願を籠玉ひしを聞しゆへ互ひに協方なして供に須賀留の恨を晴さんものと思ひしに貴殿は其時袖を振切て伊退去有しゆへ何卒して彼のゆ人は今一度廻り逢んものと思ひ方々を探り求めども一向相知れざりしに唯今當家に於て對面致し事是全く相馬神靈の御引合せなり何卒此上は兄弟の誓ひを結び下されかしと心底を打明て又余義もなく頼みければ大作と此様子を逐一に聞き取左あらば其時に出逢たるに足下にて有けるやと此時互に打撃せんとした拵らへなりと語りければ然らと我も又刀を手にて鉄砲玉を拵らへ進そべしとて是より國定は刀を鍛ふその際に玉を拵らへ互ひに其用意に心を盡しける爰も又須

を忍ひ夜なく怠情なく張紙筒を制して須賀留の驛路を狙撃なさんと専ら心魂を碎さける然るも大作例の如く張紙筒を拵らへ居る所に隔ての唐紙を剥明入來る一人の男あり大作が傍近く來る故大作手早く筒を隠して彼の男の顔を打撃めけるにかの者の申けるは他の貨座敷へ一言へ挨拶も致さず遣入し無禮の段段平は高免下され度ひなり併し只今傍へより伺がひしに邊の手細工にて拵らへ給ふは全体如何なるものにもやと尋ね拵られ大作は勃然として犬ひに怒り此奴能忽なる事を問ふ者かなまさか連へば討果さんと思ひければ一言半句の答へもせざりければ彼男猶も大作の傍近く進み寄て密か言りけるやうは我は元奥州須賀留の刀鍛冶國景とや者の門人にて喜三郎國定と申者なり然に師匠國景は須賀留家の爲に御手打にあひ心外の余り去ぬる頃相州足柄山相馬神社へ心願を誓ひし貴殿も同じく須賀留を恨み心願を籠玉ひしを聞しゆへ互ひに協方なして供に須賀留の恨を晴さんものと思ひしに貴殿は其時袖を振切て伊退去有しゆへ何卒して彼のゆ人は今一度廻り逢んものと思ひ方々を探り求めども一向相知れざりしに唯今當家に於て對面致し事是全く相馬神靈の御引合せなり何卒此上は兄弟の誓ひを結び下されかしと心底を打明て又余義もなく頼みければ大作と此様子を逐一に聞き取左あらば其時に出逢たるに足下にて有けるやと此時互に打撃せんとした拵らへなりと語りければ然らと我も又刀を手にて鉄砲玉を拵らへ進そべしとて是より國定は刀を鍛ふその際に玉を拵らへ互ひに其用意に心を盡しける爰も又須

賀留備後守とのには江戸表より御歸國の道すがらいよ／＼今日柳瀬峠の麓をばは通行の前
 觸りければ大作國定の兩人大ひに悦び直様用意を整へ柳瀬峠をさして先廻りをなし國定
 は麓にあつて服を打留しや仕損じたるやの實否を見留んと傍へある木蔭に身を忍び居る又
 相馬大作は峠の頂上ある天狗の宿り木と名付し大樹を身寄せて今や來ると相待居たる所へ
 須賀留殿には數多の從士を召具し堂々として通行致され乗物の周圍には重臣守護をなし既
 に天狗の宿り木の順道に乗物の來ると思ひし頃大作は此期を外さずして討取んと鉄砲の現
 を定先火門を切て打放せば彈丸山溪に響きて一發は先手の乗物を目かけて打抜ければ從士
 は大ひに狼狽なし儘に曲ものは山手の方よりなりと面々手分をなして山の隅々草を
 分て搜ける此時大作は一目さんに麓より下り途中にて金比羅參りの衣類と自分の衣類と取換
 へ前に守り札を掛て金比羅參りの風体にて道を急いで來りしが南部と須賀留さかひある神
 宮寺川の渡し場砂手といふ所まで送延けるもはや大丈夫なりと少し心を休居たりしが向ふ
 の方を見るに渡し守大勢打寄て何角喧嘩の挨拶をはする体なれば何事あらんと近付見れば
 盲目の女順禮を三人の侍ひ打寄て今や手打致すへさ有さまを渡し守是を託致しければ
 も彼侍ひども一倉に聞入す渡し守も殆ど當惑なし居けるを是を見るより大作は人を押分け
 中に入りかの三人の侍ひは向ひに押けるを子細は何か辨まへ申さずいへども相手は女の事
 なれば何卒は勘辨なし下さるやう願ひ奉るとすければかかの侍らひのいひけるは武士たる
 者の腰のものを汚し一言の言葉も掛す其儘に過行んとせしめへ斯の有様なりといひければ

大作はそりや武家様にはは無理のよふ存じし相手とす之高が知れたる女なり夫を兎角
 仰らるは近頃以て不實の至り先々は勘辨なさるが肝要なりといひしかは彼侍らひ大ひに
 怒り汝卑賤風体を致しながら舌長ある方彌々以て了簡ならず先汝から免へ打果さんと三
 人一時に刀を援持大作目がけて切て懸れば此方はしれ者身をかかし打込太刀先事ともせず
 三人の侍らひを相手にして暫らく挑み戦ふと見へしが大作圍敷三人とも礮打に終に神宮
 寺の川中へ投込たり彼の三人の侍らひども急流よて泳ぎもならずして終は水も濁れ一命を
 落しけるさて此侍らひ三人は須賀留の後れ供にて有しとぞ然るは大作は天狗の宿り木より
 此所まで逃のひ來り猶又爰にて斯様ある働らさせしとは實に大膽不敵の事なりける渡し守
 の面々も金比羅參りの手並の程を皆々かんじけるとなり

第五回 大作須賀留を討取事 并 大作伊達三次而會の事

扱も此時相馬大作は彼女順禮の顔をつく／＼見れば是則ち戸坂内記の娘お千代なりければ
 大ひに驚きながら素知らぬ体にて順禮に向ひ申けるは其方も未だ二八の花盛りよてかよわ
 き女の壹人旅には何ぞ様子も有ふが定て國元には両親も兄弟も有りつらん斯様の事をば
 あさすして早々國元へ立歸り両親に事を盡すが肝要ありと申ければあの順禮の思ひけるは
 何か心有けな言葉の端若や我夫にてはあらざるやと思へど其身は盲目の哀しさは顔さへ自
 由に見へされはしほ／＼したる其体にては大作猶も力を添重ねていひける様我等は迄來る道よ
 て神宮寺村といふ所あり此所は高橋市郎右衛門といふ金満家ありて世上の難遊人を救ふと

聞し故其方へ便り行へしと左も懇切な致へしかは順禮は一命を助かりし上句から何まで御
 深切なる御心遣ひは相なりゆと大ひは悦び其儘爰を立退ける跡見送りて大に悲歎の涙に
 暮けるが人目を憚かる忍び泣暫しは黙然たりしが川越どもは金比羅参り又向ひかけるは時
 々只今の如き惡侍らひ來り實に困し事なり貴公さして急がぬ旗あればぐさり押へにこの砂
 手に止まつて居て呉る心はあきやと大勢の者より頼みければ大作は元來浪々の身の上にて
 さして急がぬ事なれば暫しの間此砂手に止まつてよき手つるもあらんかと思ひければ早速
 承知いたしける故川越とも力を得て金比羅くどぞそやしける大作は此處にて半年余りも
 足を止め須賀留の様子をうかづひける然るは先頃柳瀬峠天狗の宿り木にて狙撃せし須賀留
 殿はまさしく鎧の櫃よて全く殿の安泰なるよしを聞無念なからも空しく日を過しけるよ
 爰は又須賀留殿は此砂手の渡し場を明日御通行是あるよしの前布令あつて人籍の正敷者を
 人足は撰びべきよしは達し有ければ大作は是を聞いて大ひは歡ひ居けるか渡し守の輩らは人
 籍の正敷者を二十人を選び無籍なれども金比羅の頼みは依て此輩人を差し加へ都合廿壹人
 の人足揃へける情當日に相成ければ須賀留殿は數多の士卒を随へ前を拂ふて砂手の渡し場
 へどは到着有ければ川越の人足等數艘の船を勧め就中金比羅を殿の召船に乗せければ大作
 は悦び勇々此期を外す討取んと専ら心を配りける船は既に神官寺川の中央に至ると思ひ
 し頃大作の此處ありと乗物を守護成ける四五人の侍士を持たる棹にて横なぐり又打ければ
 側楫以てたまるへさや徒士の者は真逆様川へばまるを見向ともせず殿が召たる瀾の垂を



引放し直線殿を小脇にかひ込川へざんふと飛込たり外の船より此有さまを見たる士卒ども大ひに驚きすは一大事と狼狽し曲者運すな召捕と口々に呼わりけれとも名負此川は頗る急流にして其源は坂東太郎よりあかれ落る事あれば中々容易に飛込者もあく只船を漕付て水の中をば毛鎗竹竿を以て捜るのまにて知れへきやうもなかりける此時に大作は殿を水中にて刺殺し其身は川中に泳ぎ行き水中より頭を上げて管邊を見れば人壹人も居らざれと陸に上りて衣服を絞りてある農家を頼み米を少々買求め是を喰し其儘此場を落延て何國ともなく立去りける情も相馬大作は夫より鯛の銀山一の嶮といふ所の頂上に登り此所は非人小家を建て徳利にて粥を焚須賀留の様子を伺かひ居るよある日麓の方より俠客やうの者三人登り來りて親分と思しき者に二人の子分らしき者話しを致しけるやうは如何に親分此上の頂上に待伏して首しよく奴をばらしては仕舞をさるへし及ばすながら我々も助勢致すへしと相談をしあがら登り來りて大作の傍近く來て田葉粉の火を一吸貸吳よと手にく煙管を取出しける故大作は火を進すへしと手元に有ける芝を燃してサアくはあかりなさるへしといひしかば鎗々煙草を吞けるにかの親分体の人と大作と顔見合し互ひに様子有氣に目くはせしてぞうつひき居たりける時此親分体の者二人の子分に向ひいひけるは手前等兩人先へ行て是へ戻るか窺ひ吳よといひければ子分の兩人承知致したりと其儘先立到りける跡に獲りし親分は大作か前より進みより身をへり下りてやけるは是はく尾崎様よふこそは無事で先は目出度いなり貴君は未たは主の爲には苦勞遊ばされぬ事誠に感じ入ひなりとやけれ

ば大作は是を見るよ思ひ掛けあき伊達三次なりければは邊も無事にて目出たしと互ひに思わぬ對面にて悦びあるも道理なり伊達三次のすけるは先頃柳瀬時にて須賀留殿を打給ひしも正しく替玉よて有し由然れども其傍心痛の程我等蔭ながら案じ罷り居しか只今壯健の姿を見る事の嬉しさよと落涙をして悦ひければ大作も俱に落涙を催しける情大作のいひけるは併しは身は何故に此所へは來られしやと尋ねけるよ三次のすけるやうは先頃江戸芝札の辻にて別れやてより江戸表よて千葉周作といふ劍道者の門人となつて長らくの間修行致し居りしに此間國元より我を呼寄せの書狀到來せしゆへ早速歸國致し様子を問へば此度我父三右衛門莫大の金子を勝けるを景清の源太といふ者は憎み父三右衛門の歸る所を待伏して殺害せしなりと聞て恟り其敵を討んと存し察折の驛に有て様子を伺かふ處は彼の源太といへる奴今日阿古屋屋腰掛松る行歸る道は此山を通る由を聞き故此所に待伏して討取へき手筈ありと子細を委しく物語ければ大作も氣の毒に思ひ扱々夫は心勞なるへし我等も俱々助勢致すへしと此話に暫らく時をぞ移しける

第六回 伊達三次景清源太を討事并綱五郎土塲へ立寄事

斯る所へ貳人の子分立かへり只今景清源太此處へ來るなりと注進致しければ三次は大膽ありといひなから腕の佐吉と鷹の熊五郎の三人は木蔭各其身を忍びつ、今や遅しと相待ける斯とは知す景清源太は青鬼の清吉阿古屋の松其外は貳人の子分を引連山の手邊より頂上さして登り來る待設けたる三人の荒もの木蔭より飛んで出三次は源太に打向ひ父三右衛門

か敵 倅 三次か向ふたり思ひ知れよといふ儘に刃を抜て切付る源太不意の扱打に腰を潰し周章ふためきあからも流石は我慢不敵の者ともなれば負す劣らす切結ぶ傍への小家に大作は此体を見て居たりしに三次は源太と渡り合腕の佐吉は青鬼清吉と練を削る熊五郎は阿古屋の松と斬結ぶ然るゝ源太か子分外人の者は手明あれば動もすれば三次の後ろへ廻り切付んとする有様なれば大作は之を見兼て飛んで出貳人の子分を追ひ散す此隙に三次は難なく源太か肩先より胸板かけて切下ければ何條以てたまるへき虚空を掴んで相果ける此有様を見るよりも清吉松の兩人はかんしんの親分を打果され何を目當り争そわんやど放々の体にて逸失たり三人の者大ひに歎ひ勇みけり扱も三次は非人に向ひいひける様手前もよくこそ加勢を致し呉たり斯様ある物淋しひ山中に居るよりも寧ろ我等か宅へ来りなば飯や肴の獲りものは多分あるから先く我等か住家迄来るへしと云しかばかの非人大ひも悦ひ左やうならば親分御厄介に相成るべしと是より三人の者非人を同道して桑折の驛へ歸りける借も伊達の三次は相馬大作を表向て非人と見せ掛け万事に心を配り隠懸ける時其場を逸延たる清吉松の兩人は源太か宅に飯りて此事を女房に賭りければ女房大ひは歎息していひけるは手前も親分と同道して居ながら親分の殺さるゝを見捨て歸るとは余り不人情ある致し方ありと怒りければ貳人の子分は其言わけに困りける女房は斯ては果し我兄たる梁川の驛まで目明しの強本疊や直右衛門頼み何本夫源太の敵を討て下さるへしと頼みしかば直右衛門のいひけるは元來源太か非道を行なひ罪なき三右衛門を暗討にせしめへに

斯る騒動の出来せり此義は打捨置へしと一向取敢されども妹は押て此義を頼みけるもへ流石之兄と妹の間柄もへ詮方なくも然らば討て取すへしと請かひける然に此直右衛門は自分の子分三百人源太か子分百人あり都合四百人の同勢まで日限を定め桑折驛なる伊達三次の方へ押寄へきの結構ありと幽早くも三次方へ聞へければ三次の方も夫く子分をわつめ土俵と疊を以て専ら防禦の手當嚴重に怠りなく構へける爰に又關東の三侠客の壹人此關東の三侠客といふは國定忠治大目 此中信州の住人信夫の常吉此大喧嘩を開傳へ直線馳来坂の築五郎信夫常此三人を言りて双方の挨拶を致し先く無難な事を治めける其中直りどあつて阿古屋腰掛松にて花會をひらさけるか此事を聞よりも近郷近在より我もく見候に来る者 夥く爰に又三疊の驛に井筒屋清兵衛といふ造り醬油屋あり此家の印は丸と田の字の印にて多く江戸積を盛大に致しける然るに此家の番頭綱五郎といふ者あり今日得意先の懸を集めて戻り来る其風俗と輿論の着物も小倉の帯をしめ白足袋に滑草の雪踏をはき腰に矢立帳面杯を提げ財布を肩にかけ静々と歩もみ来り又其方より来か、る者と同じ家出入する仲仕頃の源吉といふ者なりしか互ひ顔を見合して是はく綱五郎様何所へ御出あされしやと尋ねける綱五郎も是は源吉殿我等は只今懸を集めて歸る所なりといひければ左やうにていやと然し貴方の肩に乗せてある財布は大分重ひやうで御座りますといひければ否く、いかに参百兩ばかりなりと答へければ源吉は惘れ果ていひけるは貴方はた、いま井筒屋のお藏さまと御入魂に入らつしやるから参百兩や四百兩の金も自由になさるもへ説くも参百兩で御座ませう

ちと、いやまたらしく云散し時に綱五郎さま今日は阿古屋腰掛松に花會か御座りますか御見物は如何よいやと進めければ綱五郎は生花の會ありと思ひしゆへ左あらば連立すべしと貳人は同道して阿古屋腰掛松に来て見れば數多の見物山の如く綱五郎は奇偶を争ふ花會おれは素も相違し立歸らんと致しけるを源吉は思ふ子細も有りしにや無理も引止めやけるは折角爰迄來りて歸らんとは余りも其意を得ず先々五六番の勝負を御覽なさるへしといひけるに綱五郎も元來此道は好なれども此節思ひ切て一向手出しもせざりけれども今源吉の勸めよ依て是非なく見物致し居けるが向ふの場所を見渡せば數多の俠客居並て中にも一際目立て信夫の常吉が居たりし場所を見へ縞八丈の大蒲團を敷あり又右手の方には伊達三次が座を構へ左の方には疊屋直右衛門が座を構へたり其外子分一統連列りて座しよける又三十人の者ども車座に圍居し奇に偶よと勝負さる中なりしかば綱五郎に鳥渡と手出しは如何よいやと勸めければ綱五郎此時迄は慎み居たれ共素より好の道心の移りし折なれいかよも承知と肩なる財布を取て投出すと是を首諷めるに素人の事なれば聲を掛全体此金は何程有やと尋ねしかば綱五郎のいひけるは多分の事ではなし譏かに三百兩ばかりなりといひしかば並居る人々此好大分は膽の太き奴かなよき鳥が掛りしと口には出てねど各目顔で知らせ合何か勝負の事に付き聊か言葉のいかけよりついにけんかとなりけるを右手の俠客は如何致すやと三次の顔を打蹴笑を含みてひかへ居る又三次も彼の素人の者は如何爲やと戸ひに笑ひ顔をあして居たりけり

第七回

綱五郎青鬼の片腕を切事 并 綱五郎井筒屋を退く事

扱も勝負場の悪習として偶々素人の立入とさば種々様々の手段を構へ勝負を嗜着して囊中の金を掠取は此徒の仕來なれば今日しも綱五郎が勝利に成しを枉て其金を奪こんとせしより綱五郎勃然して云けるは如何に産屋是は昔の引籠り耳の垢を浚て能聞べし頃は寛治の年間陸國に安部の貞任宗任兄弟の三人謀叛を起し八幡太郎義家其父頼義の兩將の爲に戦かひ破れ弟の宗任の都へ引れけるは衆卿陸奥は片断ある故に梅の花も知るまじと宗任に恥辱を與へんものと梅の一枝を持來り此花は何といふ花なるやと問けるは宗任の即答に

我か朝で梅の花とは聞つれど大畜人はいかゞいふらむ

斯のごとく諷しければ公卿方かへつて恥を請し事ありとか我等勝負之事はしらすれども何ぞ一二をわきまへさわんや素人と思ひあなとりて能くこそ人を馬鹿にせじやと云つても一刀を抜放して青鬼清吉が片腕を水も溜らす切落しければ有合人々大ひは驚き膽を潰して騒ぎ立振たくと段々に彼の奴を打やぶち延せど土場の下は隠し置たる棒追取綱五郎目掛けて打んとするを綱五郎事どもせず尻を据て胡座をかきか、打る、者なら打て見よと恠どもなさぬ器量の若者勇ま敷社見へにける此時伊達の三次大音までいひけるは其の客人を打ば打よ此三次が相手だから來れ小わつばせもと立上れば直右衛門の子分の者ども相手は三次と有からは面白き事なり打よと勸亂す此時奥の一間に居たる信夫の常吉此大音に馳來り事の起りを尋ねければ全く青鬼の清吉が非法の由にてありければ又もや常吉の中裁に

て事を無事に治めけるが先綱五郎は三百兩の金子を元の財布に納め源吉と同道にて静くと立歸りける是よりして綱五郎は評判高くあり青鬼清吉の片腕を切たるより人呼で羅生門の綱五郎とぞ言贖しけるまた三盟の驛なる遣り醬油や井筒屋清兵衛の女房おわくといふは此家の内娘にて清兵衛は娘お國を連子して此家へ養子に入込し身なれば女房おわくの何につけ我まの氣隨をおこしけるが自分の先夫の子に國五郎といふ者あり是とお國と女夫になさんと思ひしが此程より綱五郎とお國とはどうやら割なき中と察しければ綱五郎を追出さんと思ひ居しに此頃綱五郎の噂さ高く羅生門といふ異名を取し事を小耳に狭みし故何日は其實事を探んと心を煩わせけるにあり日下女に付仲仕頭の源吉が宅に遣わし此頃夜分甚だ騒騒なる故誰ぞ丈夫なる者を一人泊り番に遣わし呉べしと申けるに此節飯合何程物騒にもせよ又用心悪くとも井筒屋の内に於ては一切心配なし然も羅生門と云んとせしが口を閉おつといふまいと何氣なく左様おらば今晩より泊り番を遣わしやべしと申す付下女は宅に歸りて源吉さんが羅生門といふ者が有から大丈夫なりと申されしと告ければ情はおわくぞ直様源吉を宅へ招きて申けるは唯今其方が宅へ下女を遣わし泊りばんの事を頼みしとき井筒屋には羅生門が居るから氣遣ひないといふたそうだが全休私内にて羅生門と云は誰の事なりやと尋ねけるに源吉は中々左様な事は申さずといひければおわくのいひける其方は包み隠しを致せしなり此事をいわんに於ては今日よりわしが方へと出入は差止すべしといわねて源吉たまりかね實は其羅生門と申は當家の番頭綱五郎様ありと語りけれ

ばおわくは此事を清兵衛に告悪行を働らき綱五郎を早々追出して御仕舞なざる可と無理に突込けるが清兵衛は此事を早くも知り居たれどもおわくの耳に入るまではと包み居たりしに今斯云ひ出されて詮術なく清兵衛と綱五郎を一間に招き申けるは其方事永くの間我家に在勤を致し呉し事實に悦ば敷存するなり然るは女房おわく不斗した事より其方の所業悪敷を云立追拂ふべきと申せとも我は固より其方を何々でも置たく思ひけれども女房おわくは家女にて我は養子の身の上なれば何々付ても云隠れ心外は思へども詮方なく依て其方一度當家を退せし呉べし是は少しの金子なれども道中の旅用となし呉べしと金子参十兩を差出しければ綱五郎申けるは御心遣ひの程有がたくいへども我等首尾よく御奉公致せしおれ此金子を頂戴仕りゆらへとも悪行を行ひし此綱五郎壹錢の金たに頂戴致すへきおわれ是あくいと差戻しければ清兵衛は大いに感し左あらは是は持返り呉よとて壹ツの箱を取出し綱五郎の前に差置は何品成やと綱五郎蓋を明て是見れそこは如何根からふつと切りたる島田番是はと驚ろく綱五郎清兵衛重ねて云けるは髪は生もの身は大事娘の心を察して往末永く添添呉かしと流す涙も子を思ふ親の恩愛左も有へし流石に猛き綱五郎も暫し涙に呉れけるか清兵衛に向ひて申けるはこそ有がたき御心遣ひ我も一旦御懐懐と御目を忍ひ不義の契を結しからは此綱五郎の存命中は何をか以て見捨す可やと云かは清兵衛は大に歎ひ互ひよ盡せぬ別れをなし綱五郎はがの桐の箱を携て其儘井筒屋方を立退けるか心さす其所は桑折驛なる伊達の三次を尋ねんと五六丁來るとき後の方より呼聲に振返り見れば仲仕

頃の源吉か一目さんに馳來り綱五郎か袂に縫ひ此度私しが口走りしより罪なき貴方を斯様なる目よ逢し何とも申譯おし何卒御勘辨下さるへしと涙を流して詫ければ綱五郎は否く何も手前の仕業にあらす全く我が悪行より起りし事決して人を恨みやすさず金子五兩を取出し其の方足迄我等を種々氣を付て呉た故少しなれども是を進すべしといひければ否く是は勿体なし貴方は旅の御身故何程有ても入るものなり御心遣ひは御無用と押返せば綱五郎我ら五兩や十兩の金よは不自由致さず是非く納め置べしと無理に金子を源吉にあたへ察折の驛へと急ぎ行ける

第八回 井筒屋家内騒動の事

扱も羅生門の綱五郎は伊達三次を尋ねんと桑折の驛まで來りけるは流石俠客の事なれば直に有家も分りし故綱五郎先案内を乞ひ三次と面會してやけるは我等過日阿古屋腰掛松よて初めて親分に面會致し貴君の倭魂ひを慕ひて日夜忘れず翼くは親分の子分にあし下さらば此上もなき仕合なりと餘儀なく頼みければ三次の才よぶ是はく綱五郎殿には何をやさるや我等より遙々氣前の勝りし貴殿中々子分なぞとはぬ存じもよら事なりと断りければ綱五郎是非なくして左わらば兄弟分の誓を結ひ給へかしと頼みける故三次は最早や断るるに術なく左わらば御存意に任せ兄弟分の盃を致すべしと子分にや付酒肴用意を致させ奥の座敷にて互ひは盃を献酬なし子分にも以後綱五郎と入魂に相成べしと堅くいひ聞せ自分は兄弟と成て暫し酒宴を催しける早酒も聞なわとありし時三次と相馬大作の入相書をとり出

し綱五郎か前に置やけるは此齋委は此程より噂さの高ひ相馬大作といわる、者の人相書をり此者を召捕へ御上へ差出しなば貳百兩の褒美金を給はり其上貳百石の侍らひに召抱へるとの事あるが何と綱五郎一番此者を召捕能手柄は有付度思ひしが手前は如何思ふやと尋ねけるは綱五郎大に呆憫果顔色變じて云けるやう此綱五郎の目が昏んで有たりしや此様を小必不義の三次とは知らずして見損ひたり夫に兄弟分杯とは馬鹿く數と悪口を罵り此様なる處は長居は無用なりと立出んとするを三次聲を掛けて綱五郎暫らく待べし其心底を見る上は打解て手前に話すとあり先々立歸るべしと引止子分の者を遠ざけ時に綱五郎是下は此相馬大作を斯まで思ひ居るかといへは綱五郎才傑待らひたる者は君も忠を盡し義を全とふするを以つて主とする此大作杯は主家の爲に一命を投うち粉骨碎身の勞を盡す是忠勇兼備の英士といふべし我ら身不肖なれども斯様なる人の爲に命を的にして壹番助勢をしたしと勇敢さ其言葉に三次大ひと感入手前か斯る心底なれば唯今一大事を明すべし實は我家は相馬大作隠懸有然れ共手前の心を探らん爲斯はやせしありと有の儘に物語りければ綱五郎さては左様にて有けるや我等いさ、う助力を致すべしと言葉の下は唐紙引明入來る大作は綱五郎の前に進寄やけるは未だ一度の對面もせざる足下の斯迄我を思ひ下さる段身に取ていか計りか唇をく存するなりと大ひと悦びける綱五郎倍々音も聞し相馬大作様は貴殿にて有けるや此上あから御入魂下さるへしと有ければ大作大ひと打解三人とも終日酒宴致しける爰に又井筒屋清兵衛の女房おわくは江戸表より急用ありと清兵衛を欺き出し拔其跡よて

國五郎と云ふと祝言をさせんものと若ひ者喜助と云者も金子を與へ主じ清兵衛を途中にて殺し呉べしと頼み遣わしける也へ喜助は清兵衛に追付んとて道を急ぎて行けるが八町畔の松並といふ所にて出逢物をもいわず切て掛るを清兵衛は大ひに驚ろき逃延んと致しけるを此方は透さず引籠へ今や打殺さんとする所へ通りかゝりし伊達の三次かの悪者を取て投捨提緒よて引括り清兵衛を救ひて悪ものを賣上げければ是全く井筒屋の若ひ者喜助よて有ければ清兵衛は驚ろき憫れ果てぞ居たりける三次は猶も賣上げ何者に頼まれて斯る悪事を爲すやと尋ねられ喜助は苦しさ堪がねわくがいは付にて猶また密夫をなし藏預りの松兵衛を内へ引込國五郎と云ふの祝言をさす事迄て悉く白狀致しける也へ伊達三次は先清兵衛を始め悪者喜助を我家に連れ歸りて井筒屋の様子如何と窺ひける扱も井筒屋に於てはかくにと國五郎をば婚姻させんとて惡々其日に相成ければ料理拵らへは出入の肴屋も付婚禮の用意を認のへ又國五郎は入湯ををし下女三人にて糠袋にて物體を磨立なしければも何分國五郎の顔は金物やといふ顔付にて眉毛は鉄さふ目は眞鍮鼻は獅子口之鱗口齒之出齒あり下女は國五郎をいろくをだてそやしける又仲仕頃の源吉は井筒屋方にて婚姻の次第を逐一綱五郎へ注進あしければ綱五郎此趣きを三次清兵衛に語りければ取分清兵衛大ひに怒り居りしは井筒屋方よはあわく娘を國を一問よまねき國五郎と婚姻の事を申聞しける中はや料理もとのひ島式の餅りもの美々敷並べ立ければ國は驚ろき涙くみてやけるは此事父上よは御承知にていや假令又左様にもせよ父上の留主の間に此様なる事をなしては如

何ある御怒りの有も計りがたし何卒父上御版宅にて御計りひ下さるべしとせしかばおわくのいふやう清兵衛どの、承知あしよかよふの事が出来るものか斯様な事を遂じすとも早々祝言致すべしといやがる者よは無理に引居すでに盃を取替せんとする所へ下女持來りたる祝ひの進物何方よりとも下よ名置はあく何品ならんと聞き見れば是は如何に桐の箱よて中なる物は島田の櫛はくは不思議と思ひ何人か此品物を持來りしぞと尋ねけるに一間の中に聲有てヤア其進物は我よりなりと問の唐紙押分て入來り綱五郎其進物の代りとして其方の白髪首を入べしといひければおわくは大にいかり誰かと思へば其方は番頭の綱五郎なるや唯今の悪口雑言扱は其方主を殺す氣あるやといひければ綱五郎成程手前を殺すのだ番頭の綱五郎といは片腹痛し此家に奉公して居る時主ともいわん又奥様ともいわん今斯暇を取て出た曉は主でもなし家來もあらず余りよ口廣き事をほさくべからず全体我は惱太き事を致す奴あり此綱五郎が成敗を思ひ知れよとわくの警引掴み引すり廻して横面をはつしと斗りに打叩き今や捨首よも爲んどせし折柄先綱五郎早まるなど入來る伊達三次主人の清兵衛兩人を見るよりおわくは仰天あし憫れ果てぞ居たりける三次おわくに打向ひ其方は道ならぬ事を働らく奴なり現在に夫の有身の上なるに密夫をなしける事言詰り斷不埒の至りなりと白眠付ければおわくは其様ある事身よ取て聊か覺へは是をいへば三次は其方いか程包み隠すとも最早叶わす又其上よ清兵衛殿を人を頼んで殺さんとせし事皆々明白よ相知れたりとくく白狀をあすべしと賣立れ強情の深き邪智女也へ中々一應よて

白状を致さぬやハヤア、其細付を是へ引べしと呼わりければ子分の佐吉心得たりと藏預りの若ひ者喜助をば引すり出して是よても其方覺へなさやと責付られ最早包み隠すとも兩人が出たからと通れずとや思ひけん事の顛末を一々に白状致しければ清兵衛はおわくに向ひ其方の命を取べき奴あれども格別の情を以て命は助け取すべしといひ又松兵衛始め喜助も重くの悪行なれども是又情を加へ命を助くべし早く此家を立去るべしといひながら重ねておわくにすけるは國五郎には當家の相續を致さすべしと情ある斗らひに三次を始め綱五郎も俱々清兵衛の慈悲を感じける既三人は罪人のごとく尻を打たれて追出され放るの体にて立出ける跡に清兵衛國五郎を呼寄其方は當家の跡續致さすべし又おわくには綱五郎と不義せしもへ是は勘當付べしと度も洩さぬ取捌きに皆く是を感んじける借も國は勘當を受返つて其身の仕合せありと思ひ戀れし綱五郎と世間晴ての女夫となり十三荷の荷物をど、のへ雲助哥にて桑折の驛へと縁付きにけるが三次の内には女夫連れは嵩高ありければ其近邊よて一軒の家を借り受是へ女夫を移しけり

第九回 お千代砂手にて艱難の事

爰に又相馬大作の女房お千代は砂手の渡し場より一里半斗りも来りしに妙手といふ驛あり今宵は此處にて一宿せんと小泉屋源次といふ宿に泊りけるが此家の主人源次の思ひけるよふ今日我宿へ泊りし盲目の順禮はすこふる美人なり彼の女の眼を療治して遣はし全快の上能金の手藝にも有付んものと思ひしかばお千代を手厚く深切に饗應しある日お千代に向ひ

いひけるは此隣家に能目醫者ありを前の眼も生れ付ての盲目とも思われず彼の醫者も懇つて見る氣は無やと尋ねしかばお千代は大ひに悦び其精なる能き醫者の有ければ何本お世話を頼みすべしと有し故へ源次は直に此醫者を迎ひ心を盡して看病しけるは流石に洩したる眼なれば凡三十日斗りにして眼病速かに平癒しければお千代は此上も無く悦び源次に厚く謝し夫より五六日も打過ある日源次は向ひ誠に永くの御厄介に相成りひしが今日は出立致し度存し候故へ一先づ御堪定下さるべしと付夫くは事相濟けるもへ源次のいひけるは今日は初立の事なれば我等道途でも送り進すべしと有ければお千代は色々是までの深切に預りし上勿躰なしと辭退すれども源次は強ひて送るといふ故へ詮方なく同道して砂手の奥山に至りければ源次は爰どと人の通行あきを幸ひね千代をとらへ無理無躰に強姦せんとおしけるもへお千代は大ひに駭るき遊んとすれども源次は放さずしつかと捕へ其儘お千代を押し倒し既強淫及んとせしかばお千代は一生懸命まで大聲を上げ人殺しと叫ぶ源次は構わず此奥山へ誰が来るものかと乗掛らんとする所へ北の方より綱代の駕を昇きて登り来り雲助は此躰を見るより駕に乗りたる者にいひけるは親分台点で御座るかど駕を下しければ中より出たる一人の出家物をもいはす源次が首筋引摺み廻ぐと見へしがどつかと投付其儘源次の衣類を剝取赤裸にして鬘を以て松の木に縛り置其駕もお千代を乗南を指して昇て行跡に残りし小泉屋源次は人殺しなりとわたり立けるに爰に又一人の俠客休の者此所を通り掛て扱は山賊の類旅人を惱すからん助け呉れんと馳來つて是を見る

一人の男松の木に縛らて居りければ先髪を解遣わし其襟子を尋ねるに源次は私しは旅の者にて此山を通行致せし所山賊の爲金子を取られ刺さへお千代といふ私しが妹を勾引かされ斯の通りの仕合なりと實らしく言葉を工みに述べれば彼の俠客いひけるはして其曲者之何國へ行しやと尋ねけるに唯今南を指して行しとすける故左むらば其妹を取り返し遣わす間我らに付て來可と跡を尋ふて追懸行に彼の出家お千代を山の林に連れ行兩人の駕舟に手足を持せ已れお千代の上に跨り今や強淫せんとの有さまを遙かよ見て取彼俠客一目さんにかけ來り矢庭に出家を引退けて一刀を抜切かければ僧も同じく援放し受つ流しつ切ひす此方は源次と二人の駕舟を先途と打合けるお千代は又も此人惡人ある哉尋り難く思ひしゆへ此騒ぎの隙を伺がひ元の砂手の驛へ逃て行此時彼の俠客の太刀や増りけん終に出家を切殺し谷間へ蹴落しける又源次は駕舟二人を打倒し互ひにはつと一息突俠客のいひけるは手前の味が居らぬといひければ源次之氣が付是とも如何にお千代をば逃せしと先俠客に一禮を述べ私しは是より妹を尋ね候故是にて御別すべしとて双方は南と北とへ別れ行く扱も源次はお千代の行衛を尋ねんとて先砂手の驛へ立返りて方々を尋ね聞しに其女の體に大黒屋藤兵衛方に泊りしと聞源次は大に悦び大黒屋方指して至りける斯てお千代は砂手の驛に逃返り來りて先大黒屋藤兵衛といふ宿へ逃のびあるに藤兵衛に奥山にて難に逢し事を遂一に語りければ藤兵衛すける様夫は定めて御難義成れしあらん併し我等が方にて泊り有ば左様なる氣遣ひは一切は無しと力を添へお千代をば維用部家へ察

内を致しける然るに小泉屋源次も亦當家にて一泊を乞下女の案内にて二階を通り暫らく有て入湯に行戻り掛に彼のお千代當家にて何れの間に居るやと問毎くを見て歩行しに不斗一間を差覗き見るにお千代は當家の亭主より二百兩の金子を預け居りし所を源次等と見留たれども素しらぬ振にて其儘我間に立歸り暫らく有て藤兵衛が帳場へ居傍らに出來り源次いひけるは如何に三ヶ月藤兵衛久し振だちと聲を懸れば藤兵衛は是はく源次とやあひか何用有て我家には來りしぞと尋ねる源次はいふよ手前今日は味ひ仕事をしたなどいふに藤兵衛は眞似面にて味ひ事とは全体何の事あるやと云ければ源次はいふやう知らぬと思ふか今一間の中にて女順禮より金子貳百兩を預かつたのであるふかなあの順禮は我ら三十日も前より色く手と盡し能仕事よせんと思ひ今日順禮が出立を送り奥山にて仕事にせんと致せし所山賊どもに防けられ彼女を取逃したり依て此金は已にも分口をして二ツ山にして呉べしといひければ藤兵衛の思ひけるは悪ひ奴に見付られしなり手前に見付られては地獄に佛だ滅多見逃す事ではないから如何にも分口は致すなり併し此方に一ツの頼み有り余の義に非ず今宵夜更なば彼順禮の寮間へ忍び込刺殺し呉べし左も無時は我等の惡事の顯はる、也不便乍も順禮を手掛死骸をば奥庭の飛石の下へ埋め置跡の厄介ならざる様致し双方安心して其上にて百兩の分口を手渡し致すべしといひければ源次は尤もなりと早速是を承知して二階に上り夜の更を待居たりける

第拾回 喜三郎國定お千代と名乗逢ふ事 并 三ヶ月藤兵衛發心の事

扱も家此のあると藤兵衛は下女のおよしを呼んで彼貳百兩の金を預け借云様はおよしやモウ
 大體にて我が心に隨がふてもよかりそふなるのせやないかと云しに由の申けるは貴方は
 當家の親且那の事故中へ否みはすさねと若且那の藤太郎様私しとはいろく御口説さ
 る故誠に迷惑を致しける上又く貴方さま左様に仰せられて至極困りすべし此事計りは御
 勘辨下され度しといひければ藤兵衛は悴位ひの云事を順着せず我しが心に隨がふべしとい
 ろく口説にぞかよしは此主をば計らんものと思ひ居しかば此時漸く承知して在あ
 らば今宵寛ぐと御話しあすべし併し且那様先程私しは立聞をして居りましたら源次様とや
 らは金の分口をさざる様子彌く誠になさるか尋ねに藤兵衛相手は名うての源次なりよ
 もや取すには濟すまじといひければおよし申けるは旦那は大分淺智恵あり金子をば渡さず
 とも能事あり私しは夷小判を貳百兩計所持して居り升れば源次の分口の時預り置しは此金
 なりといふて御渡しなされたら夫にて事を濟すべしと思智恵を敷ければ藤兵衛は横手を打
 大に感じなる程夫は宜べしと是に隨ひ實の金子と我小判と摺替帳簿の中へ隠し置所へ悴
 藤太郎外より立歸りておよしをば一間へ招ていひけるは手前は向て我に氣を揉すのだ早
 く好き返事をして廣くべしといひければ私しは否みはずさねとも親且那が兎や角と被仰る
 也へ今迄好返事せささりしが今宵社寛く御話し申故夜中頃には私しが居間の雜用部家ま
 で忍びて来て下さるべしと約を極めて別ける扱もおよしは用事を取片付様先に立出けれ
 ば登人の男來りておよしは向ひ手前は餘程長く侍せたり一体何をして居たりしぞといひけ

れば是はく金太さん約束の金子よりは少し多ひが貳百兩斗り出来たりと被しければ金太
 は驚き是はく多分なる金如何してか持ちへしやと尋ねければ先程當家の主人藤兵衛の
 順禮の金を預り宣仕事せしを私しは又た我小判と替させて横取をせしなりと語りければ
 金太は先金子をば懐中おしおよし用意をせよといひければ先衣物を着替簞笥を引さらへ風
 呂敷を包み込其位取れば跡には衣類一ツもなしと風呂敷包をばかしくの金太に脊負せて
 裏の切戸口より抜出しが又およしのいひけるは是金太さん毒を喰ば皿迄と迎るの次手にも
 ん貳百兩斗の仕事は風來ついで有けるも是も一所に致したらば如何なりといふに金太は
 耳を寄せ其仕事はいかなる事そや夫は外でもなひが今日當家へ泊り込たる女順禮器置は十
 人並に勝れし美人今當源次といふ奴が殺す事は必定あり當人に右の譯をばいひ聞せ助ける
 を名として彼女を誘き出し何れへなりとを賣代なさば貳百兩位ひには大丈夫の價ありとい
 べに金太は然らば手前程能く斗らひ見るべしといひしが直におよしは取て返し雜用部家に
 到りお千代に逢て申けるは如何に御女中様おあたは何も御存じなければも當家の亭主藤兵
 衛と申は盗賊にておあたさまを奥山にて強淫せんとせし手古良の源次といひ合せ貳百兩
 の金を取んとて今宵夜中を相圖にて此部家へ忍び入刺殺さんとの工みなれば疾く此場を
 落懸給へど知らせけるにお千代は大ひ驚き然らば何分能よふ頼みすべしと有ければ私
 しども此家を立退候も御同道を致すべしと十分に欺むさ連立て裏口より逃出しける此
 時かしくの金太お千代の風俗面影を見てつくぐと思ひけるは此順禮人品といひ器量とい

此様なる女をば一夜なりとも抱寝せば此身の本望なりまたおよしは女に似合ぬ悪徒よて
 今我れ若年よて殊にかしくの金太とまで異名を取し男振のよきゆへに間夫とはなしけれど
 も我れ又年老て風俗の衰へたる其時は又々外にて男を拵らへ我れ打果さんも計り難し此様な
 飢呑なる女と添ふよりいつその事よおよしを殺この願禮を女房にせんと自分勝手の道理を
 付たちぢぢに心を變じおよしの後ろに立廻り手拭にて既に首を絞るとなしける故およしは
 驚きもかき叫ぶ此時お千代は我命の恩人なりと思ひしかばをよしをば助けんと争ひけるに
 此時一人の俠客体の男出来り今日は女の泣聲の流行日なり見捨て行も本意ならずと先金太
 をば引捕へおよしを助け事の子細を尋ぬるよ二人の者は身よ暗き事の山くれば一向に
 譯も語らず又風呂敷包みなど有ゆへは怪敷思ひいろく拷問よ及びければ流石女の事ゆへ
 よおよしは金太か心替りせし事より風呂敷包みは盗み取し衣類にて又此女中と勾引さんと
 て勝り出せし譯柄又金太の懐中に貳百兩といふ金子あり是は此女中大黒屋藤兵衛といふ宿
 の専主よ預けられしを藤兵衛は是を奪ひ取んとせしを猶又我れ取せしなりと初先よりの
 しだらを遣ちもあく白状致しければお千代は大いに忙れ果けるかの俠客と憎き二人の振舞
 かなど先貳百兩の金を取戻し是をばお千代に返しやり細付の二人をば問屋場役人よ預け
 る此時お千代かの俠客に向ひ今日計らすも砂手の奥山にてあなれ様の御蔭にて命を助かり
 いま又この難を御救ひ下されし段誠よ御禮のやよふも是なしとて大ひよ是を謝しければ俠
 客は願禮に向ひ全体をなたは何國の者なるやと尋ねしにお千代は心打解て斯大恩よ相なる

上は何をか以て包み隠さん私しは生國江戸表よて戸坂内記とや者の娘にて夫と頼みし御方
 は此節嚴敷御配符の廻つたる相馬大作本名は尾崎秀之助といふ者なりと語ければ俠客は大
 ひにおどろき扱はをあたは相馬大作殿の御妻女にて有けるか我れ則ち其大作殿と兄弟の因
 みを結び兄上と尊敬したる御方なり斯や我れ國定の喜三郎といふものなりと物語りければ
 お千代は是を聞て大ひに悦び力を得しと勇みけるさて又大黒屋藤兵衛方に於ては悴藤太郎
 よき時分な死と夜半とおぼしき頃雑用部屋へ忍び来りて寐所を探り見れば闇がりあれども
 蒲團を出たる跡の明て有ければ藤太郎の思ひけるよふおよしは今便所よても行たりと見へ
 たり戻るまで狸寐をして居しなれば歸り来りて蒲團をば捲て見るは必定あり我が忍び来り
 しと思ひて我が尻をば捻り又は脇の下をば標るを空嚙して鬨も又樂しみなりと一人り言を
 いひつゝ狸寐入をして居たる所へ二階より手古良の源次拔足にて密かに雑用部屋へ忍び入
 一刀を抜放し蒲團を捲らんとせしに藤太郎可笑さをこらへ扱こそおよしの来りしなりと空
 嚙して居る所を源次は一刀の下に藤太郎が咽笛を難なく差通しければ何條以てたまるべき
 虚空を掴んで相果ける源次は血のたる刀をぬぐひ鞘よ締め死骸をふとんよ巻付て疊の下に
 入匿すぐ様臺所へ駈来り首尾よく打果したる事を藤兵衛に述べければ然らばとて藤兵衛とか
 の夷小判の百兩を渡しければ源次悦び改め見るよ何ぞ計らん似せ小判なれば大ひに怒り
 や藤兵衛余の者なれこの様なる計略にも乗るべきが相手は手古良の源次様だ余りに人
 を馬鹿にするお其手は喰よと驚の小判是へ出せといやひ腰よて詰寄れば藤兵衛も些も騒が

ず順禮より預り置し金は此小判なり是が否あらよせといへ源次は忍へ兼早了簡相ならすど一刀閃と抜き放して双方互ひに欲の一心負す劣す打合所へ明よくと表の戸を頻りに叩きける時の有故藤兵衛は源次に向ひ暫らく待へし面倒あれとも何者なるや明て来るから先刀を引といひ渡し戸を明け見れば壹人の俠客順禮の女を引連れ跡は問屋場の役人金太およしの兩人を引立來り此時俠客と藤兵衛は打向ひ其方は順禮より預り置たる貳百兩の金を出すへしといわれ藤兵衛仰天なし今殺したる順禮が何故爰へは來るなりと不審源次も是はと憫れ果猶亦の男は奥山にて逢し俠客なれば是惡事の顯われ口ありと此場を撥て裏口よりいつの間にかやら逃失ける俠客重ねて藤兵衛にいひけるは子細あつて其貳百兩金之此順禮の手に戻れり先一應其方の筆筒の中を改め見よといひけるに藤兵衛は一切台点行す先筆筒の引出しを明け見れば中は皆く蟬脱の壳なれば藤兵衛驚き是は如何よと駭け迫るを俠客は金太およしの惡事を述べ二人の細付を出しければ藤兵衛は又も驚き忙然たりしか此時およしが惡行の段々を悉皆く白状を致せしなりと云ひければ藤兵衛猶も不審をなし先程源次か殺したるは全体何者なるやと雜用部屋へ行見れば其處ら邊りは血だらけにて疊の下を見るに大蒲團にて巻し死骸のありけるもへ早速捲りて是を見れば現在我子藤太郎なりければ又もや肝を潰しけるが此時藤兵衛國定の前に進み出てすけるは斯の惡事現在に天罰の程こそ恐ろしけれと此場にて髪を切り出家となり已後惡行をば斷然と思ひ切り故何卒御情を以て我らの惡罪を御赦免下さるへしと真心見えへて詫ければ喜三郎國定は其發心は

先て、罪を免し取らすへしといひしかは藤兵衛は大ひ悦び此家の家財を取片付是を惡事をなしける上我が伴の菩提の爲とて皆く眼を告諸國順禮をなさんとて何國を當といふ事もなく出立に及ひしは殊勝なりとぞ思われける猶又金太およし兩人はいろくせんぎの筋あるへきてと所の代官へ差出しに相なり裁判の上よ追放の罪に極まり奥州を所拂ひす付られける又喜三郎國定とお千代の兩人は砂手村の立退神宮寺村を志ざしてぞ出行ける

第拾壹回 尾崎富右衛門お千代に面會の事

扱も喜三郎國定お千代の兩人は砂手を立退信州神宮寺村高橋市郎右衛門が宅へたより來て市郎右工門よりけるは此女中は先頃當家に於て御厄介に相成りし畫師宗丹の女房にては故姑く御世話下されたくと頼を置き其身は大作の行衛を尋ねんとお千代に別れを告其ま、此所を立出て諸々方々に尋ね行ける扱市郎右衛門へお千代の藝道を誠し見るよ女の嗜み一通り何知らすと云事なく先第一は裁縫生花舞曲香茶などを達しければ隣家の小女等日に集ふて琴三味杯を稽古よ來りけるをとお千代は毎日是を教へければ市郎右衛門も誠に悦び我家の娘の如く寵愛なしけるにあり日御大身の武家高橋市郎右衛門方へ御立よりとありければお千代は饗應萬端料理拵らへ床の間の活花までなして相待所へ愈く代官御入宅にあり先奥の別間に通しお千代は跡にて合羽籠を見て有ければ酸劔疑に上り割書に尾崎と書印しあれば自分が夫大作と同じ姓名同じ紋をれば若や親類縁者の者にてはあらずやと角兎と心に配

り居る奥に有ては尾崎富右衛門料理拵へ且床の間の生花の工合頻に打ながめ大ひに感じ主市郎右衛門を呼ひ此料理拵へと云ひ且又生花の手際實に感伏せり何人の拵らへ手業あるかと尋しかば是は我家に逗留致すお千代と申女ありと云ば代官女には珍敷者なり一應對面致度是迄呼寄て呉かしと請はれしかば市郎右衛門へお千代を呼ひ來り自分は用事に立て行跡には富右衛門お千代と差向ひ申ける様其方が料理生花の手際先程より感伏せりと御譽の言葉有しかばお千代此時すよふ恐れ乍股様は奥州南部の御藩にて尾崎富右衛門様とはすされすやと尋ねしかば如何にも我は尾崎富右衛門あり斯云ふ其方は何れの者あるやと尋られければお千代は私し事は江戸表にて戸坂内記の一女千代と申者にて御前の御子息秀之助様と夫婦の縁をつなぎし者なりと語ければ兼く中山幸之進殿より聞及ひしお千代どのにて有つるかど互ひに盡せぬ物語に暫し時刻を移しけるが先其日は過早明方又至りければ代官は市郎右衛門を呼ひ此女は手が縁者の者故連歸るへし是迄承らく厄介に相成り忝げあく存するなりと一禮を述てお千代も厚く禮を述へ同道にて南部盛岡へぞ歸りける

因にいはく何故富右衛門代官となりて信州路へ來りしといふは南部侯には此ほど秀之助の忠義を聞き召れ感賞の餘り富右衛門を招き其方が倅秀之助我領地の爲に一命を借ます碎身の忠義を盡す事最早手が心底に通じたり依て疾くも尋ね出し國元へ連歸るへしとの仰より富右衛門は諸々方々を尋歩行けるとぞ腕の佐吉恥辱を蒙る事

爰は奥州桑折の驛より十八町片在る今手村と云所あり是伊達三次が子分の一人腕の佐吉の住所にて久くは佐吉我家に歸りて見るは表は戸と締切てありければ不審に思ひ暫しイそみてありければ隣家の人々出來り是は佐吉さまあななが承らく御留主で御座つたから飛でもない事が出來せり全体あなたも物騒な男の食客と女房を内へ置て一月儘よ二月と御留主もへ逐お久さんも凄さの余り出來し事ならんと云ば佐吉一切合点もかす何んを變な事でも發しなるやと尋ねしかば變な所かお前さまが留主になつて其跡はお久さまと食客の金太と種々にいちやつき差向で酒よ味淋よと買て來て夫は毎日晝と暮と夜となく見られた事では御座ぬ其わけよく道具家財皆賣却ひ夫を旅用金にして此間二人連にて欠落致したりと話しければ佐吉は大ひに駭き申様皆様も一体深切氣の無人かな斯様なる事のならぬ先は何故一應知らし下されずや夫では隣家の好みも何にも無と怒りければ人々は放くの体にて各宅を賑りける跡に佐吉默然として氣が逆上け假令何國へ逃隠る、とも捜し出さず置へきやと方々を驅廻るに向ふより驚塚團平といふ者來り途中にて佐吉とべつたりと出逢ひテ、誰かと思へば團平じやなひかテ、手前は佐吉かどふだ至極顔の色が悪ひじやあひかどふしたものだ尋ねられ佐吉申様團平聞てくれ己が留主の間にお久めがかしくの金太と不義をさらして何國へか欠落せしかり夫故へ是から方々と尋ねあるかと思ふなりといひしかば團平それは誠に氣のどくだ併し其おひさ金太の居所は己が知つて居る此間いさ、か用事があつて煙屋直右衛門の方へ行しに火ばらの傍に居つて居は儘に手前

尾崎富を
戸汲内記娘
千代に初
面會スル圖



が女房お久で有たからせりふがあれは疊や直右衛門の方へ行へしと云ひつ、團平は立別れける此事を聞いて佐吉は大いに力を得て其足よて梁川の宿なる疊や直右衛門が門口まで来て櫛子を伺がふよ直右工門が宅は間口三間にて格子造りの家なれば格子の透間から内を覗て見れば火鉢のそばに表向きて坐て居しは女房おひさよとあれは佐吉は勃然し是正しくおひさ金太の兩人なりと思しかば入口瓦落離と御明せいきなり一刀引抜てかの男を見掛て打込ば男と胸り斗りに身をかはしければ佐吉は火鉢の真中としたが切付れば火灰散て煙の如く此時彼男は佐吉が腕や腕かと掴み何奴なりと顔を見て手前は三次が子分佐吉じやないかといこれと胸り顔を見れば金太よあらで直右工門なれば是はと驚き親分眞平御高免下さるへし賢は私しが女房お久とかしくの金太と不義を致し聞は親分の内に隠匿有る由にて今其實否を糺んと格子の外より覗し所紛方なき女房おひさ又向ひま座りし親分を金太ありと見損ひ粗忽千何共や譯なし何本御勘辨下さるへしと頼みしかば直右衛門が才襟畢竟我が腕に覺へが有て身をかはしたなれば社並々の者なれば汝らが爲に命を果すへし又不義ものを返せならは扱て親分斯様くでと入譯云て来れば相手之男を磨く直右衛門だ夫れを兎や角といふ理なるや然るに唯出し扱に内へふみ込此直右衛門を踏付た致し方をこれに何ぞや親分人違ひなぞとは尿があきれる以後の見せしめ思ひ知れよと斗りに胸へ取て投げれば直右衛門の子分大勢来りて親分此奴如何致さんといへば直右工門才襟此所にて殺すへき奴なれとも先達て三次と喧嘩を致したり夫に今此處で佐吉を切る時は直右工門は未だ喧嘩の根を以

て居るかと思われても残念也依て今日の所は助けて取らせと子ふん大勢足で蹴るやら疾を
 かけるやら犬の子を放り出す如くは首筋を掴んで追出しける此時佐吉は心外なれども相手
 は大勢あれば虫をころして我家へ歸り一つの思案を定め親分三次が方へ來り申様親分折入
 て御願ひ申度儀有といへば三次は六ツヶ敷折入て願ひ成やと尋ねしかば佐
 吉は何とぞ私しは御暇を下さるへしとしみしと申ければ三次は佐吉が顔色と云且は様
 子有氣な願ひなれば佐吉や手前へは何か心配で有や打明て申へし親分子分の間柄三次が力
 よ及ふ共けは事を斗るへしとさか見捨は致さすと云ければ佐吉大ひに悦び外の事にもあら
 す先達てより我ら留守中女房お久かしくの金太と不義に及び其二入りが壘屋直右衛門方
 に居る由を聞今日直右衛門方へ参りし所火鉢の傍は男と女房と差向ひで話しをせし故彼は
 金太なりと見違ひ飛込で切付しに金太に非ず直右衛門親分故へ早まつたりと事の次第を述
 て色しくと詫げれども一向承知なく子分の者大勢來りて我を打擲なし入口の外へ投出さ
 れ大ひなる恥を蒙り其場まで切死せんと思ひしなれども親分に一應御暇を貸ひし上にて
 と心を定めたち飯りしとの次第と一々述ければ聞て三次は何事と思ひしは左様の事
 なるや其様な事なれば此三次に一應相談せは力もなるへし其爲先の親分子分なり此三次
 は宜様取計ふへしと三次は綱五郎を喚今佐吉が斯様くの譯にて直右工門へ不禮を致し
 又佐吉が女房と密夫の兩人を取返しに行て呉かし我が行も宜様者なるが夫では事大行に
 あるゆへ御苦勞乍ら手前が應對して呉れべしと頼みければ勇氣の綱五郎早速承知を致左も

らば直參参るへしと三次が宅を立出て築川の壘屋直右工門方へ行て案内をせ直右工門親
 分に些と御申し致し度儀御座る故親分に左様告げ下さるへしと云ければ子分此事を知らざ
 れは出來たり是は綱五郎何用有て來りしと問ければ綱五郎申様外の事でも御座らぬが今
 日腕の佐吉が當家へ來りて何か不禮を働らさし由親分三次に代りて私しが嚴重も御詫申上
 り時に佐吉の女房お久金太といへる者と不義を致し親分の内に厄介成と承り何卒二人を
 御返し下さるへしと言しがは直右工門申様手前の申處尤もあれども此直右工門も一旦隠
 上からは命に代ても世話するを夫れも通て戻せどもめらは三次か内の大事の客人と引換に
 致すへしと云ければ綱五郎も此返答に困りしなれども流石の綱五郎否もなさず夫と親
 分の望みにまかせ明日阿武熊が原にて朝六の時双方取遣り仕べしと立派な返答をしけれ
 ば直右衛門も左むらば翌日を期すべしと互ひに堅く約しける綱五郎は桑折の驛へ歸り此題
 きを逐一三次に話しければ三次申様彼も名うての直右衛門なればよもや本人の金太は渡
 すまじ又此方も實の客人を遣つてたまるべき綱五郎は横町の我家へ飯り三次は子分を集め
 申様明日は阿武熊が原にて壘屋直右工門と大喧嘩を致により朝六の時より皆く揃ふて出
 るべしと云置又一間へ大作を招き時に大作様此度目明しに喚出されし由にて明日斯様く
 の大事件御身此所に有て之如何なれば是より始はらく身を隠し下され度私しが死分よて
 江戸鉄砲洲屋敷き横町に鉄砲藤次といふ俠客御座る故是へ御便下さるへしと一封の頼み状
 を添て渡しければ大作大ひに歡ひ何から何迄其方の心遣ひを存るなり跡の所は頼又綱五

郎は宜敷傳へ呉べしと其儘繋折の驛を立退き江戸鉄砲津屋敷横町鉄砲蔵次方へとたどり行ける

第十二回 阿武熊が源大取合の事

扱も翌日の早天より子分凡三百人斗り寄來ば三次は兼に向ひてやよふ假令直右衛門子分の奴原刃物得物杯を持て争ふとも此方は得もの登本も持まいる事相あらすと嚴敷戒しける此時子分一統に申よふ高が疊屋の子分也得者杯持すとも頼より頼の兩手が有故拳を以はり倒さんと勇み居る子分のもの綱五郎最來るやくと待けれども未來らず既四つ時にも移けれども未だ來ず子分の者は濟をきらし三次に向ひ綱五郎親分は憶病神も取付れて何所へか遊失しあるべし杯と種々悪口を罵りければ三次は綱五郎に限つては中々遊隠れすへき者に非ず最程なく來る可と子分をすかしける所へ向ふの方より綱五郎何か風呂敷包みを携さへて子分らに打向ひ楯く楯く大ひに待せ申て定めて御不興にありつらんと挨拶なしければ子分一統綱五郎親分には別嫌のかくにさんと頼せもいふて御座たから一様遅くありまといひしかば綱五郎打笑ひ是はく異な事を問ものかな我は女房と感言杯を申て約東の時刻を外さんや女房おくには如此を委まかりしと風呂敷の中より國が生者さし出せば三次始め群居る子分ら大ひに驚き扱く綱五郎親分の鉄石心よと皆く感じ此勇氣に勵まされ猶も勇氣百倍す綱五郎申やう斯女房を斬て來からは更心懸り無しさあ皆く衆はつゝ参るでは御座らぬかと云は子此聲を捕らるへし先駕の中に綱五郎を乗せ込み綱の棒

鼻は三次が控へ其外三百余人駕の周圍を取控て靈氣揚くとして歩み行此時身の丈抜群の大男駕の棒鼻を手に掛て此綱始く侍と呼ばれば三次を始一統の子分何奴なれば此爲体と大ひに怒り手を下ろさんとなしける此男些も騒がれ我社之相馬殿の弟分國定喜三郎といへる者あり此客人は我が成へしと云しかば三次綱五郎も兼て大作より弟分國定といふものありと聞及ひければ扱御身が國定殿よな我之三次綱五郎といふ者にて相馬殿の家來も同前ありと云しかば互ひに爰にて打解喜三郎を駕に乗せ棒鼻の左右より三次綱五郎兩人附添堂々として阿武熊が原まで來て見れば兼て斯したる事なれば直右衛門方には駕二挺は同勢四百人計り付隨ひ六つ過る待請してありければ三次が來るを見るより曳や々の聲諸ども傍近く進み來り直右衛門は客人の代りに綱五郎か駕に乗り來ると思ひの外綱五郎が一鼻立て來りける故案に相違すれとせ二挺の駕を下し此方も一挺打下し先疊屋の隠懸人二人を出しける故見てあれは前より知れたる替玉なれば綱五郎此二人は人が違ありと云は直右衛門も其方の客人と乞けるも喜三郎國定駕の中より出でければ直右衛門申やう是も人か違ふありといへば綱五郎大ひに怒り直右衛門よく聞へし其方より客人を所望するも客人を連來り此客人で無くは何故姓名を云すや只だ客人とある故へ客人を連來るを人違ひ杯とは人を嘲弄するや了簡ならずと怒ければ喜三郎も大ひに憤怒し大音にてヤイ疊屋の小童は共客人を所望しなから人違ふとは言語同断なりといふの拳を振り上げ當るを幸ひに張倒せば直右衛門の子分の者衆を逃すを打のめせて手々罵口或は割木金棒得物くを携て國定目かけ

て打付る此時双方大聲上げ奮撃す實に戰場の軍門に異ならず直右衛門方には得物を以て向とも三次方は無手よてあれは三次之子分を勵し彼か得物を取て勝負せよ得物を出しなは負なるぞと爰をせんぞと美圖をなしければ我一に先を争ふて得物を引たり直右衛門か子分目掛て打こそあれ瞬間に墨屋の子分打延されれども彼の方は大勢なれば必死と入替り双方共血の雨を降り死骸は積で岡をなし血はなかれて紅の川を生し鏢きを削る形容は目覺しかりける事ともなり此時に在ては八州の役人数十八此喧嘩を見るよりも御用の聲へ張揚て召捕へんとおしけれども流石に奥州に名を得たる俠客群の大取合おれば御用の聲位に頼着有は社火花を散して打合くなしけるは容易く騒動の止まされども三次か方では役人に手向かはす快よく捕縛し付ける故直右衛門方よも是非なく縛に付けければ役人の方々は召人を引連て所の役所へ拘引しける

第拾三回 郡役所裁決の事

斯て役人衆は阿武熊か原の喧嘩の黨を御引立に相成郡役所にて御取捌きよなるに伊達三次す、と出でや上げるよふ今日喧嘩の始末發端といふは私しか子分腕の佐吉なる者あつて其妻かひさなるものと食客金太と密通をいたし家財有金等を拐帶欠落仕り其兩人か墨屋直右衛門方に世話に相しり右佐吉心外の餘り墨屋方に至り本人を取返さんとなしけれども直右衛門何か不禮をいふて一向は請かはす故に猶人を遣はして頼みければ直右衛門は我等の家の人と引替にすへき横着有し故双方阿武熊か原にて交換すべき約束仕り今日右場所

て取かへの所直右衛門本人を隠匿し置外人を連來りて人を欺き又我方の客人を望み故此客人を連行しに人違ひの旨を述兼て喧嘩の仕組にや驚口割木或は金棒杯を携て打擲せり又我方よは喧嘩を好まぬ證據には得ものを持す唯彼方より打込得物を取て向ひしなり故に聊不法を行すと弁舌爽やかに申上ければ役人は是を聞き直右工門に向ひ其方は何故斯る亂暴を行ひしや逐一や上べしと仰られしかば直右工門の方は重く惡ひ故返答につまり一言の言葉も得や上されは役人か横直右工門一言の返答せざるは三次の條に相違あしと見へたり是りや汝は聊か役用を勤然ながら公儀の恐れをも憚からず亂暴せし段不埒至極なり其方に急度所分も有誰かある直右工門か宅へ到本人兩人引立へしと下知隨ひ下役は直らよ兩人を召捕役所へ引連來れば役人仰せあるやう金太かひさの兩人夫を願す密通いたせし段重々不届至極なり重罪にも行なふべき奴なれども格別の憐みを以て奥州國拂ひや付べしと仰せられける此時喜三郎進み出て申様恐れながら此金太と云ふ奴先ころ砂手にて盜賊を働らさ人の金子を掠り取り尙其上に女を勾携せんといたせし所計す私し此ものを召捕ひを情をくはへて助けしに又もや此度の悪行不届なり我等金太を取計ふ旨もあれは何卒私しに給はるべしと願ひければ早速御許有ければ國定金太を賞ひ請其場よて辰二ツに切殺しける又直右衛門は所追放となり三次をばしめ皆の者は御擲あく差もとされける

關長助須賀留備中守を狙撃する事

扱説相馬大作は江戸表鉄砲州屋敷横町鉄砲廠次方に食客の身となり其身を忍ひける又藤次

も三次よりの添書もあり名高き大作の事なれど手厚く接て待ければ大作も大ひに歡こひ暮しけるか爰も三月上巳の節句四方も祝ひの其折柄大作と雖彼時兩國橋邊を通り掛りし前面より數多の供人を引連諸候の下城と思しく嚴めしき行列にて前を拂ふて來る、あり大作は若や須賀留にあらすやとうかふふ案に違はず須賀留なれば能所にて出逢たりと大ひに悦ひ橋の傍へに身を潜め待居る所へ御供廻り意氣を正し堂々として御通行に相なり今は殿の乗物兩國橋の中央にいたる時大作抜刀して踊り出乗物目差して切付る此時從士大ひに驚き曲者あるそ付捕れと聲々々呼わり中を隔て防ぎ戦ふ大作はたゞ只乗物に近寄秘術を盡して切立確立瞬く間に數十人を切倒し姑らく争ひしか此時須賀留の扈從の臣大島何某殿の乗物を引擔け橋を渡り隄んとなしければ大作は駕を遣てはならしと必死を究めて付入しか大勢の從士に圍まれて心は矢猛疾れども思ふ様に儘ならされは心外に思ひ一聲叫んで飛と見へしか大島某を只一刀の下に切伏せ駕の垂を明んとするに猶從士間を斷大勢鋭く打込む刀に恰も眞劍の雨降るごとくなれば今は大作も危く見へし所へ川中より一發の彈丸大響をを生して殿の乗物を打抜たり士卒大ひに騒ぎ立典者通すな召捕んど一生懸命の太刀先に大作もたまりかね橋の欄干に手を掛ると見へしが眞逆さまに川中さして飛込たり須賀留の士卒は水中にも典者ありとこれをさがし又は殿が御身はと伺がへははや胸先は打抜れて息絶たり是れ從士も勢を落し死骸を乗物に昇て立歸りまた跡に残りし侍らひて急須賀留の手廻し川中さしてさがしける水中には大作は川上に泳ぎ行ける所へ向ふの方より一艘の苦



東都西橋
須賀留道行
所ナ種ヶ鳥ニテ
お図
とま考ふ

船漕来り泳來る大作の首筋獨んで引上げ船の中へと乗せ込て兩國橋の上手をさし漕行て淋しき所へ船を繋ぎ船頭は大作に向ひ申様若や足下は南部藩にて尾崎秀之助の名は相馬大作殿にてとなきやといひしかば大作不審の体にて斯いふ足下は何人にて御座あるやと尋ねしかば船頭申様我こそは同藩にて檜山奉行下廻り關長左衛門が一子同名長助ト云者あり足下の忠誠感ずるに餘り數多南部の士ある中足下一人國地の爲に粉骨碎身の勞を盡す願わくは我も少々の助力仕たく思ひ候へば國を發足おし諸方を尋ね求むといへども貴殿一向に相知れず然るも今日はからず面會仕り此上もなき身の大慶と悦び勇んで物語れば大作は左すれば兼て噂は聞き關長助殿にてありしや足下が助勢下さるとあらは誠よき片腕を得たり然し只今の砲發は御身にて有しやと問しかば長助申すやう如何にも我にて聊か助力の端をなせしといひしかば大作は誠に御身の御手際恐れ入しと譽め時長助殿我は當時鉄砲藤次といへる者の宅に姿を隠し居候故此方に同道仕り萬事御相談申へしと是より兩人通立て藤次か宅へと立歸りける爰に又桑折の驛なる三次綱五郎喜三郎佐吉の四人も藤次か宅へ集り互ひに無事を賀し右七人の人々を晝夜種々の相談いたしけるに長助の物語りに我父長左衛門檜山奉行下廻り相勤めし所上役荒浪十藏治といふもの當時須賀留家に従ひ矢張檜山を支配せり此老元來南部侯より八十石の祿を頂戴せしに須賀留に引込られ二百石の祿をもらひ請非道も二君に仕へける所か我父長左衛門が邪魔なる故父を歎ひき大勢打寄て暗打になし足を切て谷間に蹴り落せり父は命助りたれども身體自由ならず我此恥辱を雪がんと

と思ひ候故一度かの地へ趣きたしとありければ此時大作やう左様の事なれば片時も早く恥辱を雪ぎ玉ふへしといひしかば傍に居たる綱五郎及はすながら我等助勢仕るへしと是より二人同道にて南部檜山として急ぎ行又大作は藤次の傳手より江州琵琶湖の近在隆高寺といふ寺へたよりせける

第拾四回 關長助檜山奉行と打事

斯て長助綱五郎の兩人は旅の武者修行の風体にて姿をやつし足に任せて漸々と日を重て檜山に至りければ日は早西山に没しければ奉行の溜り所まで來り我等は諸國武者修行の者にて計らする道に踏迷ひ誠難澁いたし候故何卒今宵一泊を頼まければ居合せし人足此事を奉行十藏治に知らせければ武者修行の者どあらば一手合せ致したし此處へ案内申へしとありければ人足此由を兩人に告げれば二人は大いに悦ひの体にて奥へ通り先荒浪に而會し今夜と一泊を乞ふて御承知下され千萬有がたく存し候なりと一禮をのべてあれば荒浪と誠に易き事あり今宵は寛々休み玉ふへし我は此時な山中暮しければ世間の事を一向は知らず御身達は修行の身なれば定めし珍らしき話しもあるへし疾々御咄し下されたとて足下の生國は何國にていづれの御藩あるやと尋ねしかば長助申様我か生國は南部盛岡にて父は關長左衛門とすて其伴長助ありと云より早く一刀援放し奸賊十藏次觀念致せと近寄て肩口より胸板さして唯一刀は切付たり何條以て溜るべき其儘その所に打倒れ此時綱五郎も奮激して有合ふ人足切倒し暫らくの間凡十五人計り打取れば十藏次の倅重三郎難敵とや思ひけ

ん門口に立出て警報の螺貝吹立れば此螺の音を聞付て檜山の入足凡三百人ばかり斧を以て集り來り曲者遊すな打延せと十重廿重を取巻て中取圍み我劣らじと打かゝる綱五郎は事どもせず切立投立 働と何條三百人の入足入替り差代り向ふ程は流石の綱五郎も大勢の爲ま後に透進さ 愆て足の踏處を失なひ千尋の谷庭へ輾落ければ入足共は此深谷に落ては何條命有へさやと殘る奴を打倒せと大勢長助に打て懸る此方はしれ者と事もせず礮投に投付く左方へ飛ては右方に顯われ一生懸命必死となつて打合しか 愆て木の根に躓り倒れ伏す所へ入足とも上へ重なりて手取足とり長助を尸字跡に縛上げ此山にて松井三平下調なし須賀留へこそは引立行ける

關長助所刑綱五郎義死の事

初關長助は檜山にて荒浪十藏治を打果し數年の本懐を達すといへども入足共の爲にめし捕れ須賀留よ於て御しらへになりければ此とき長助ややう我こそは此節御尋ね嚴敷配府の廻りし下總浪人相馬大作とや者なり法例に基き刑を受へしとありければ扱は相馬大作にてありしや汝は何故に我が須賀留家を執念深く斯まで敵對するや已れ嚴刑に行なふへしと則ち仕置場を設け一町四方の竹矢來ををし須賀留市中を引廻しの上にて刑所に至り檢使の役人は床几よかより見物山の如く矢來の外に集り名高き大作の仕置なれば取くは話しをなし見物いたしける此時長助は青竹の上に坐り太刀取の役人白鞘の一刀に水を流し太刀を振ひて傍に進み後手よ廻り太刀を振かざして今や首を打ち刎とあしける時竹矢來の外より大

音聲よて役人其太刀下す事始らる侍へし其人は相馬大作にあらず定めて似名を騙者ならん眞の相馬大作是にありと群居る人々を拜分く道入り來りしと大兵肥滿の侍らひにて立派ある出立其風体を見てあれば先發來は黒羽二重の着附は同じく水色羽二重の下着黒縮緬の背割羽織四十二節の探編笠よ而体を包み從容く出たる形相は是を眞の相馬大作と思はれける此時彼侍らひややう似の大作は疾く落廻玉へ此實の大作が刑に付可と云つよ飛掛て長助の細目を切捨て早々落廻玉へと逃し後自分の傍ある太刀取の役人を只一刀に切倒す此体を見て須賀留の士ども又もや曲者出たり召捕れくを差圖すれば有合ふ士も被放し侍らひ見掛て切付る此方の侍らひ事もせず散く切倒せば瞬間に死がいの山を積此とき須賀留の侍ひ追くにはせ集り一人の侍らひを取圍んで取ふ所へ三次佐吉の兩人ありと聲を掛け綱五郎力を得て兎貴よくと來て呉たりと三人一時切捲れば又もや曲者増たり須賀留の方では狼狽なしける此とき綱五郎戦かひながらやう三次先今關長助を落したり早々ともに落延下さるへし此は所佐吉と兩人にて殿仕るべしといひしかば三次ハ此宵寒に離ひ綱五郎佐吉二人に任すへしと其儘三次は落廻ける綱五郎佐吉の兩人は入勢を相手にして命限り働らさで今は二人とも血まふれになつて仕合しが佐吉は敵ヶ所の重陣に身体働得すどつかと倒息絶たり綱五郎は猶もひるまを荒廻り役人數十人切り殺し手続違ふもの數知れず綱五郎は最早是迄と思ひしかは積重りし死骸の上に座を構へ手早く白襦はんの片袖を切り裂き右の小指を噛み切り垂る血よて一語碎世を書す

義は依て命を落す日本の俠客

羅生門綱五郎

と肥し死したりける此体を見て須賀留の士どもは興の醒たる如にて大ひは感けるとと扱又
送廻たる關良助伊達三次の兩人は桑折の驛へ歸りける

因みに曰く三次佐吉の兩人江戸表にありしは今處此に來り加勢する事不審なれどひ左
にあらす右兩人は長助綱五郎の首尾よく仕負たるやの安否を探らん爲奥州路を來りし
に大作仕置の事を聞大ひは驚き其事實を乱さんと該所に来る所長助大作と偽名を名乗
て刑罪の有様をへ兩人が加勢せしとぞ

第拾五回 相馬大作縛ふ就く事

爰は又相馬大作は鉄砲藤次の世話にて近江湖水近江寺高寺といふ寺へ書師宗丹と號名し身
を隠しける然るに爰に屋屋直右衛門は鐵追放請しより何かを大作を嗅出し阿武熊成威の仕
返し且は莫太の褒賞にも有付んと諸々方々を尋ね廻り斗らす江羽に來り隆高寺の住職と至
つて入魂なれば此寺にたより來り大作が隠匿あるを嗅出し剛染の隣内四五人を語ひ大作
を誘出し呉れへしと頼みければ早速承知し中にも宗丹と入魂にする者おれば湖水船渡と名
として誘ひ出しける大作は元來漁を好みければ是に隨ひ十二人程連立て船渡を來りしに二
艘の船にて漁しけるは直右衛門方にては兼て其用意なしければ八方より大作を取寄召捕へ
んとせしかども何條名うての大作なれば容易に召捕事能わされども大作も船中なれば進退



關良助
伊達三次
鈴木茶茶
大作を
タスル國

自由に纏らざり得ず難敵とや思ひけん湖水へさんぶと飛こまけり直右衛門之兼て手當なし直
 し大綱を取出し八方より取圍み次第く、に寄ければ恰も海中にて漁父の魚を獲るが如くな
 れば流石の大作も此綱に身を捲れ如何とも詮術なく其儘引上られ、了字綱みに縛りて所役所
 へ引渡され此役所にて下調をし此事江戸表へ報しければ江戸表より引渡すべき下、有けれ
 ば則ち綱乗物に乗せ込て守護の役人三十人斗り附添ひて送り懸籠が森まで來りける時傍
 の石碑の間より二獲の鉄砲響きを生じて重役二人討倒せば守護の侍らひ大ひに驚きそりや
 曲者なりと狼狽して騒ぎ立處へ石碑の間より國定喜三郎鉄砲職の兩人飛で出で當る幸
 ひ切立し散々に打のめせば守護の侍ひ畏を失ひしどろにあつて逃出せば此間より兩人鷹鷲
 駕を打破り盟の中より大作を出しければ大作は何者の仕業なりと顔を見れば國定職次の前
 人なり大作大ひに悦び我斯石捕われしを如何して知りしやと尋ねしが職次亦其職は私し
 余義なき用向有て江筋隆高寺へ参りし所和尙の物語りも御身さまが傳てて來りし番師の
 宗丹は本名相馬大作といふ者にて去る日直右工門といふ者の爲に召捕われしを話しを聞て
 仰天し直様宅は歸り此由を語り國定職と合せ此所は侍伏せしなりと云しかる大作は切を
 左様の事あるやと打悦び追手が、るを擲り長話しは點と打連れ其儘職次が宅へ歸りければ
 又其助三次も江戸表へ登りければ五人打寄て話しをなし大作の事柄を其助三次に聞せ又其
 助三次は須賀留にて綱五郎佐吉の死去せし事を語りければ大作始其助職次も不便の事を致
 せじと大ひに落涙に及び就中大作は我が爲に皆々斯造なし呉る事の嬉しさと悦びあへり斯

て晝夜とあく相談して只々須賀留の動靜を窺ひける

第拾六回 大作妙見堂にて須賀留を窺ふ事

今日は大作良助國定の三人深編笠にて面体を隠し大師川原へ参詣して歸り來るを向ふの方
 より立派ある侍らひ深編笠にて女房と娘を連て來り今三人の者と行違ひし侍らひ跡を振
 向き三人の姿をしろくと打詠先けるは大作始其助國定も若や我等を探索する須賀留の家
 士か但しは上の役人なるやと思へは此方も彼の侍らひを打詠め居る此時侍らひ大作の傍近
 く跡戻りそる故三人は扱こそ案は違はぬと思ひしに彼侍らひやや若や貴殿は下總浪人相
 馬大作殿にてはあらまやと問ければ彌々以て心免るされすと思へども名を隠すは余り此與
 と思ひ如何にも推量の通り我は相馬大作なりと答へければ彼侍らひ直笠を脱て久々にて
 逢ひやなり先は御壯健でと挨拶なすは何所の者といふに加藤市郎右衛門といふ者にして貳
 百石の旗本にて當時御馬廻り役を勤めり先頃大作下総秀吉とあつて須賀留やしきの別當に
 入込し時同し別當の朋輩にて山下市藏といひし人なり父は御馬廻り役にてありし故修行の
 爲須賀留の別當に成て馬の育方を試みしあり此時大作は、山下殿にて有しや珍敷所に
 て御對面仕るなりといへは加藤市郎やう足下其時雀の宮にて須賀留殿を害し専ら忠名を上
 げ其上尙今日に至る迄須賀留家を絶さんと千辛萬苦し給ふ其粉骨の勞を察し感服せり我は
 今父の家を相続せり又我宅は旗本の事ゆへ他方より探索もなければ姑く我家に身を隠し
 玉ふへし及ばずあから聊か助力仕るへし先く我家へ來り玉ふべしといひしかば大作も此

節をふやら藤次の内も氣遣敷ければ兄弟の如くせし加藤なれば長助國定も委細を話し愛にて別れを告げ其身は加藤市長右衛門方へ隠匿はれける或日加藤は大作と連立て淺草奥山妙見堀へ魚釣りに行てありけるに須賀留の法被と着たる別當が徘徊なしけるを加藤は引留て瓢箪の酒を振舞別當にややう其身達は何用にて最前より此處を徘徊なさるやと問ければ別當ややう何を隠そふ此程相馬大作とやら云浪人か殿を仕覘ふ改火を避んと妙見宮に講摩を修し給ひ明日は心願七日の上り日なり夫故我ら幾度も此處を往來仕るなりと答へしかば左様あるかといひ別當は醉氣に觸れめいゝ一禮を述て五六人の別當皆く立去りける然るに加藤大作の兩人は釣を仕舞此日は兩人立歸りける

第拾七回 大作淺草妙見堂にて須賀留家を騒がす事

初も加藤市郎右衛門は其翌日に大作を招きや様今日は足下登人淺草妙見堂へ釣を垂れよ御越しなさるべしと勤ける大作も加藤の心底を計り思ふやふ加藤はわれを手引して斯やなるべしと大ひに悦び左あらば今日は拙者登人参るべしと瓢箪に酒を入れ又竹の皮包に肴を入れて魚釣道具を携さへ立出て妙見堀へ至り釣を垂れある時は竹の皮包を開て瓢より酒を出し自分登人酒を飲于しける處へ例のごとく須賀留の別當代へ出來り大作か釣せしを詠めけるを大作は別當を勤め無止に酒食をあたへけるを別當等流石は下戸なれば大ひは勤ひ酒を飲大作は所存あれは思ひ切香ましてありければ別當皆々醉を催しいろく巖事云了り大作に一禮を述て立去もあり又廻つて醉臥もあり大作は最好時分と思ひければ醉臥たる

別當の印し伴天を脱し自分と其伴天を着なし釣の道具も何も打捨て妙見堂へ馳行けるは須賀留の人々も印し伴天を着せしめへ難有て咎むる者もなく通しければ大作は首尾好ど心中は打笑み猶奥深く進み堂中を見てければ講摩を修せし焚火の煙りよて内の様子一向に分明ならざれば暫らく目を配りて伺ひ居るに殿は武週長久の聲はり上て祈れける此時大作得たりと悦び忍より懐劔抜放し殿を目がけて切付んとせしかば早くも殿は身をのほさんとせしかば狭き敷臺故は恐怖の余り高臺より真逆様に落ければ傍ら並居し須賀留の家士大ひに驚き十二三人程と殿を圍て是を守る殘る士卒の曲ものやらじと取巻て召捕くと聲くは喚はり切り掛る大作は殿を討んといろくあせれども何分大勢の士卒は隔てられし事なれば思ふ様にあらぬば切齒をなし愛迄十分近づきながら打取れざる事殘念やと悔たれども陰方なく大勢に叶ひ難しとや思けん一方の間を得て足早にて逃け出すを須賀留の士卒呼はりて曲者逃すを追懸よと無二無三追かけるを大作は一生懸命飛がごとく踪暗まして逃出し加藤が宅に立歸此事ども市郎右衛門に咄しければ市郎右衛門夫の殘念の至なり又よ好機も有べしといひ先其日と打過しけるにふやら此節旗本の内にて相馬大作を隠匿ものある由誰云となく風説をしければ大作も此家に永居はなるまじと思ければ加藤市郎右衛門に厚く謝禮を述て其儘此家を立退中山幸之進の宅に行幸之進と面會して久くの挨拶なしければ幸之進も我子の如くせし大作あれば殊の外歡又大作の忠勇を譽先日夜盡させぬ永話なし

て先大作は此方に姑其身を潜伏専ら須賀留の動靜を窺ひける

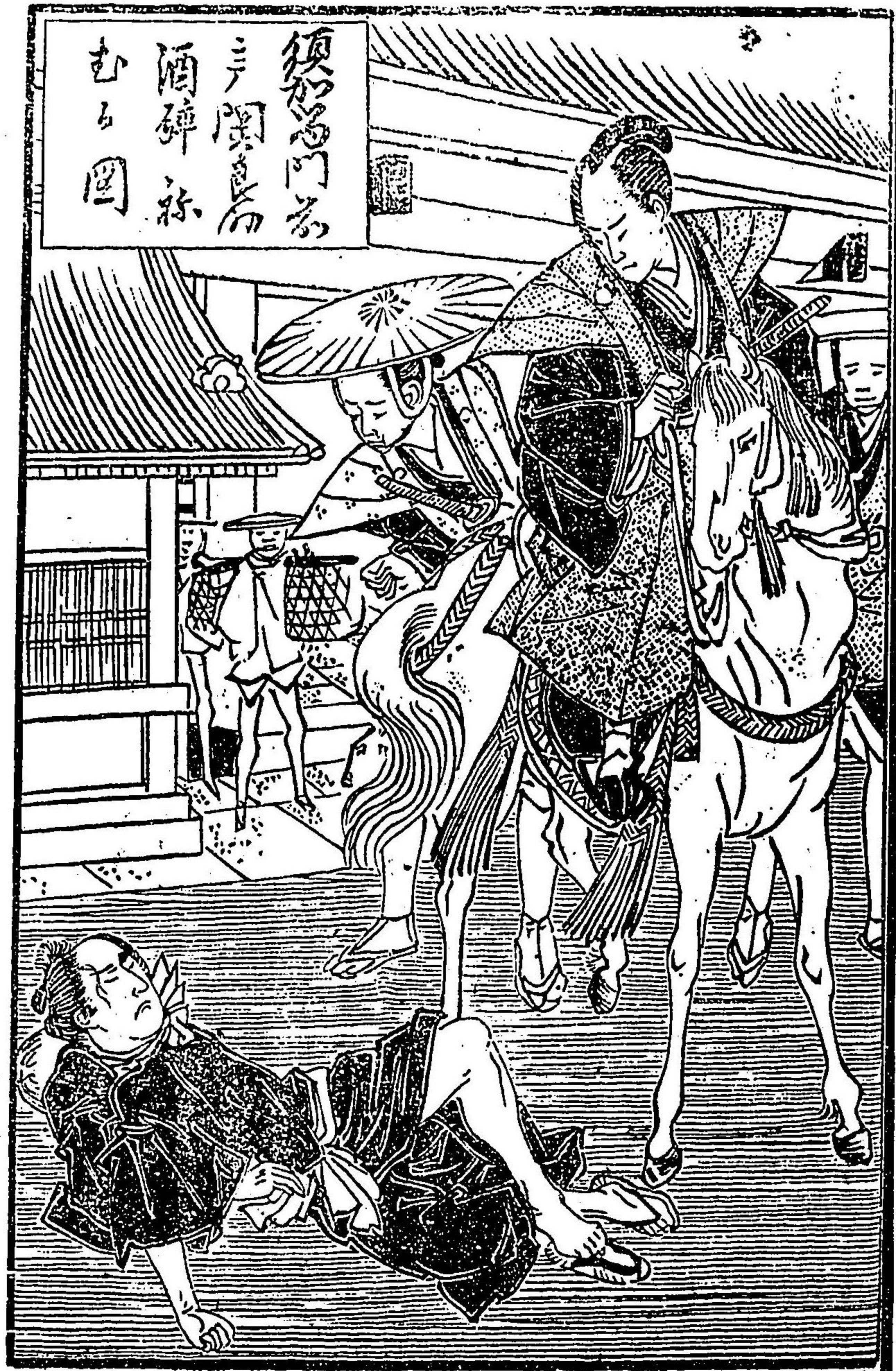
第拾八回 大作味増屋と成て須賀留を獲ふ事并須賀留右京亮を砲殺する事
 斯て大作は中山幸之進の宅に有て不斗赤穂義士の一人堀部安兵衛武康の事と思ひ出し武康
 は吉良家の様子を探し自分の顔一面に灸をすへて顔の跡を崩し八百家となつて吉良家の邸
 中を知りしとあれば我も斯せんものと思て直ちに自分の顔に漆を塗付けければ姑らくの間
 は顔は一面に腫れけるを鏡に寫し是をればよもや人相書に似る所少しもあらずと打悦ひ古
 道具屋へ行て味増屋の荷を求め金山寺味増屋と成て毎日賣歩行一日須賀留の屋敷門前
 にて辨當を開ひて食をなしける所へ一人の門番出来り味増屋に向ひ手前は向ふ先の見へぬ
 者かな通行先の入口の鼻先で辨當食ふとは無禮であらふ少し片脇に寄へしと云しかば大作
 は是はく虚氣とせし眞平御免下さるへしと詔をなし其日は立歸る又翌日も須賀留の門前
 に至此度は一外徳利より酒を出して無闇に呑み干し又門前立寄ければ別當又もや見付け
 此奴毎日く門前よて喰をあす奴かちと此ければ大作は態と酔いたる風にて是はく御門
 番様御立腹の体なるや先わく其様は怒る者に非世の諺にも笑ふ門には福來るとやせば
 先鎮まり玉ふへしわなたは毎日怒て御座ると見へて私しの様な難作者が門に來るへし杯と
 いろく嘲哂なしければ門番大ひは怒り憎き味増屋の首前かなと棒を以て打んとすれば大
 作は驚きし体にて味増の荷を擔ひ放くの体にて逃出す門番はつふやきながら門内に入る
 其翌日になると大作は酒肴を持参し門番に向ひ昨日は酒は酔何が無禮をす上誠に相濟す
 す何卒御勘辨下さるへしと是聊なるものなれども私しが心丈け何卒を御納め下さるへし

と酒肴を出して詫ければ欲の世界門番も此贈り物も氣を直しやう如何に味増屋我等別に
 怒りはせねども餘りな言方故へ威して見せたりしなり決して怒るゝあらず心置かく毎日
 門前にて中食いたすへしと手の裏返して云ひければ大作はしてやつたりと心中に悦ひ其日
 はいろく話をして立歸り其翌日より門番と至極入魂となり間が酒肴を持参して十分
 に門番を取込み終には門番の取持まで屋敷中を廻るやうになし日數十日も立中又は屋敷の
 へ部家く或は仲間別當の大部家迄大廻廻らざる所なく皆此味増屋の正直を感んじて味増や
 くともて嚇しける一日例の如く屋敷中を廻り商ひ致しける所へ殿の御歸館とあつて大部
 家の向ふを御通行なるに大部家の別當共下座して頓首なす此時味増屋の大作も見付られ
 てはならずと思ひければ大部家の中へ飛入隠れながら様子を探ひ殿が遙か向ふへ行過ぎ玉
 ふと思ふ時分に大作は直ちに荷物の下に抽斗しより種が鳥の短筒を取り出し居刻も別當の後
 よが規を定め火門を切て砲發すれば隣れむへし須賀留右京亮殿の脊すじより胸板かけて打
 振たり何條もつてたまるへきと斗りに打倒れ其儘息は絶たりける此有様を見るよりも
 スハ一大事と須賀留家中曲者召捕れくと呼わり曲者は何所とかけ廻り家中の鎧が上を下
 へと混ざつあしけるを一人の家士やう儲かに曲者は荷を擔ひし者なりといひしかば士卒
 の者ども馳せ來り味増や見掛て打て掛る此時大作は請つ流しつ打合しが殿さへ討ち士卒を
 惱ますは無益なりと思ひければ此方の道を開き大部家の武士窓より跡踏まして逃出すそり
 や曲者逃すかと窓の跡より追ふも又門口より出て逃ふもあり爰に一人の侍らひ沉醉ひ千鳥

足にて彼方へ逃進此方へよろめきながら追ひ来る須賀留の士卒を小口から投倒し或は一刀の下に切付向に遮りて一向は追せず須賀留の士卒大に怒り又途中にて一人駈きたり此者から打果せと打てかゝるを待らひは事どもせそ追来る須賀留の士卒を風みまろしに片付てしづくと行過ける是則者成といふに關良助もて有しあり

第拾九回 大作盛岡に歸り家精取決の事

扱も大作は中山幸之進宅に歸り幸之進は面會をしや標永々厄介は相なりいへども姑く他方へ行べしと一禮を述て暇を告げ直さず藤次が宅より來りて關良助に對面をしややう我等も最早須賀留家三代まで討とり絶したる上は自訴仕べくあれども取計へき言あつて余義なく國許へ立歸りたく跡より自訴仕へし足下は何卒先へ自訴を申し下さるへしと云しかば良助は然らば拙者先自訴仕るべしといひ互ひに堅く合せ大作は國定喜三郎伊達三次鉄砲藤次の三人を引連奥州南部盛岡として立歸りけるされば關良助は大作と合せし如く願書を以て北涉奉行の諏訪美濃守殿へ自訴いたし跡より相馬大作といふものも自訴仕るべき言をも申上しかば美濃守どのの關良助を取り調へ中禁獄仰せ付られけり爰にまた大作は奥州南部盛岡へ歸り久々にて二親に調しければ富右衛門夫婦涙を流て大ひと悦び我子ながら天晴の事動感するは余りありと譽そやし又女房も千代も大作の飯國に飛ひ立計悦こひうれし涙に呉れ至しが姑あつてややう妾もあなたに懸慕ひしより親の異見をも用ひて艱難苦勞をなし最早あたまさま逢ふ事あらざるかと朝夕と思ひ暮まけるに今お顔を拜する事の嬉しさ



よと雖もすがりて落涙せり此時大代千代は對ひ其方も我を斯迄思つれども我は何條天下の御尋者にて大罪人孰通ぬ我が一命逆も其方とは連れ添ふ事成ねば疾く斷念具れかし又爰に居る國定喜三郎は其方の爲には弟ふんやへに此國定と夫婦に成りて呉れかしと頼ければお千代は噎び涙だ猶彌増あらうたてや永らく待し甲斐なもく現在夫に逢ひ乍其御人に添ふ事ならずと有ば何面目にこの世に在ん生て詮無事あるへし此上は斯仕るといふより早く傍なる刀おつ取り自害をせんとなしかれば大作は是を止め早まるまじ其方が今爰で死するどあらば未來永く縁さるへしそれでも其方は承知かと云れて千代は自害もならずしはくとして歎き居る大作は又國定に向ひ御邊も定めて斯様ある水嗅女と添ふも異ものと思ひつらんが是は大作が生涯の頼み聞き届け呉れへしと頼みければ國定は様否く我らさよ非ず斯たる貞婦のお千代どの我等何の否まやへきや身に取て大慶ありと答へしかば大作大いに悦重ねてお千代にやう我媒ちになる間潔祝言して呉れへしとかへすくも宥つ賺つ頼みければお千代も思ひ直し自訴なさる御方に添ふ事のあらざる如何程悔ひども詮あしと斷念承知も及しかば大作大いに悦ひ直さま祝言を致させ自分は媒ちとなりて尾崎の跡断を立にけるとぞ

第二拾回 南部大膳大夫候大作に對面の事

斯て大作は父富右衛門にや様私事須賀留候と打取たる上は此上望も果しぬる事成ば潔よく自訴して御仕置を受可覺悟あれば何卒今生の内一度殿南部侯に拜謁致度旨願ければ富右衛

門中よふ其方が願ひやさすとも殿より魚侍作玉ふ也と語りければ大作涙のみこひばかりなり夫より大作の飯圖を報しければ殿は大いに歎あつて早速御招ありければ南部の一家中此事を聞我もく見物に集ける然るも秀之助は御前間近く進みければ一家中の面々列を正して左右に居並び秀之助といふ者は如何様なる人柄らあらんと目を澄して見物せり此時殿は正面に座し玉ふ秀之助は殿の御傍近く進み寄り先は御壯健の体を賀す此時殿は落涙を遊はされ其方事我が國地の爲も身命を投うと粉骨碎身の勞を盡す段予が膝處へ感徹せり過分存するなり其恩賞には盛岡一の宮神社の片脇は相馬大權現と崇め祭り遣わすへしと仰られければ秀之助大いに悦喜し有難き殿の御仁恵かな聊かの忠勤をなせしに斯迄で御心慮に叶ひし事私し身を取りてこの上もなき大慶なりとや上げ又殿より上るやう私しが天下の法令も背き假初よを御歴々を三代まで打取たる其罪輕からす是より自訴仕りひば私しなき跡之父富右衛門事宣しく御目を掛け下さるへし又家續の義之私し弟分國定喜三郎を以て相繼しひ故此義も願ひ奉りひなりとやければ殿は其方願の趣は一々聞届たれば心安かるへし又江戸へまいる道にて不意の危難も難計ければ予が印を以て供の者の大勢引連れ予が参勤の格式にて出府すへしと心添有て又秀之助に助力いたせし伊達の三次鉄砲藤次郎の兩人に奥美金を賜はりし上に永代二百石の大祿にて御召抱へに相なり又國定喜三郎も右同斷賜物にて祿は二百の石加増にてそれく賞を行なはれける

并南部檜山取返す事附り大作長助刑に處する事

扱も尾崎富右衛門は南部全國の審圖面と願書をもつて時の老中へ願ひ出ける其文面は曰く
 乍恐願文を以て願上奉りい今般須賀留家に於て猥りに我領山へ登り棒杭を立て八十三里
 の檜山を所領としてこれを奪ふ其故は原檜山我が領山たるに依り一度將軍家より用木を獻
 すへさ合ありしに不幸も公儀の命を背さしを好機とし須賀留家より間を得抽んで用木を
 獻せり是れ我領山へ斧斤を入れ横掠する所也何とぞ別紙審圖面御引合せの上まで宜しく御
 賢察賜願奉りいなり

右の願書を差上げれば元來この事は御上にもよく御存知ありし事なれば相違なき事論を待
 すして明らかなり是は依て一言の故障なく檜山を取戻しける又須賀留家に於ても打續き不
 慮の横災に罹られし未なれば自然と衰弱は陥入押て一言の上達もいたさずとなり爰に北御
 奉行諏訪美濃守殿には大作を御白洲にて其方は南部の士にて尾崎秀之助飯名大世と稱する
 者で有ふがなと問れしかは大作やや私しは左様なる者にあらす下總の浪人相馬大膳の悴
 にて同名大作といふ者も相違なく父大膳浪人して江州瀬田の邊にて精死仕れりよつて我は
 一人り身にて諸國修行の所惡業の者を斷をもつて誓願とすもへに須賀留の奸惡を聞き斯は
 相尋らひしなりと答へける奉行も見すく尾崎秀之助たる事分明あれども義心忠勇の名に
 めでて敢て拷問もあく大作良助の兩人法律に基つき斷罪の刑に行なはれける嗚呼忠勇なる
 かな大作良助のごとき者古來未聞の英士よて凡武士の家に生育するもの之殿の馬前よて討
 死するか又は死をもつて諫言せし類をもつて忠義の者とする所大作をどは殿の蔭身よて

骨の勞を盡すこと實にまた古今稀なる忠勇の壯士よして其の芳名を後世に遺すの美談と
 云ふべし

檜山相馬大作忠勇傳終

明治二十年十一月十六日 翻刻御届
同 年十二月 出版

定價金六十錢

翻刻人

藤谷虎三

東區内本町二丁目一番地

大阪

發兌

偉業館

東區唐物町四丁目十番地

發兌

岡本仙助

同所

發兌

北島長吉

東區淡路町二丁目廿三番地

